

東京大学のサッカー

闘魂90^{年の軌跡}

第3部 随想録



グラウンドと部室 今昔物語

御殿下から離れた時期も

OB・現役の協力で苦難克服

現在（平成20年9月）の東大ア式蹴球部の部室は農学部構内にあり、ホームグラウンドは御殿下グラウンドである。なぜ部室とグラウンドとの間にこれほど距離があるのか疑問に思う向きも多いことだろう。以下、部室とグラウンドについて、ア式蹴球部創設以来の変遷と、現在の部室を建設した経緯を中心に歴史をたどってみたい。

加賀藩の馬場の一部とか

1. 大正期

御殿下グラウンドは、江戸時代には加賀百万石の前田家の馬場の一部だったということを聞いたことがあるが、資料に当たっていないので確実な情報ではない。明治時代には今の場所にグラウンドがあったことは確かである。

竹腰重丸は入学する前に「東大に入っても練習するグラウンドがないぞといわれたが、狭くても広場があればサッカーの練習はできる」と答えたという。

竹腰の入学した大正13年の当時の御殿下グラウンドは、今よりも狭く、しかもテニスコートが半分以上を占めていたようである。といっても今のテニスコートのようにフェンスで囲まれていたのではなく、支柱（それも取り外し可能な）が立っていて、ラインを引いていたという程度であったと思われる。それは恒例の陸上運動会がこのグラウンドで行なわれていたことからの推測である。

当時のテニス部は、ラグビー部やサッカー部より早くからあって強い選手もいたから、後発の部に使用権が認められなかったのであろう。大正14年春の帝大新聞には、サッカー部は火、金は駒込染井（現巣鴨駅そば）の本郷中学（現本郷高校）で、水、土は御殿下の片隅で練習しているという記事がある。

サッカー、ラグビーとも関東の強豪チームとなったことから、両蹴球部とホッケー部が共同して

大正14年からテニスコートの移転を大学側に強く働きかけていた。その結果、テニスコートを巣鴨の庚申塚近くの大学所有地に移転する案を大学当局が提案してきたが、テニス部の強硬な反対でなかなか実現しなかった。

今の農学部は、当時は旧制第一高等学校のキャンパスだったから、サッカー場はあっても人様のグラウンドだった。一高はサッカーもラグビーも強かったから、近くても借りることは困難だったろう。駒場にあった東大農学部と一高がキャンパスを交換するのは、昭和10年のことである。従って、今の農学部には東大のグラウンドやコートを求めることは不可能だったのである。

しかし、強硬策をちらつかせながらの大学側の説得によりやがてテニス部も納得して、大正15年の秋の京大戦後に庚申塚に移転することを了承した。また、御殿山側にあった道路をつぶしてグラウンドを2mほど拡張することになった。この年の12月の帝大新聞に寄稿した野津謙のリーグ戦総評には、東大ア式蹴球部はグラウンドがかなり自由に使えるようになったことが書かれている。

また正月恒例の高校大会も、それまでは高師グラウンドを借りて行われていたが、主催者である東大ア式蹴球部のホームグラウンドができたことで、昭和3年正月からは御殿下グラウンドで開催されることになった。

周辺は漱石の小説の舞台

2. 昭和期

東大ア式蹴球部の部誌である「闘魂」4号（部室建設記念号、平成元年発行）にある、当時のLB会長・高山英華（昭9卒）の文章によると、

「僕が東大に入ったのは、昭和6年の春であった。その頃の御殿下グラウンドは、一周300mほどのトラックが主で、それを覆ってサッカーやラグビーのグラウンドとして併用しておった。そし

て、その西北の隅に、柔道場や食堂などの木造の建物があった。病院側には立派な桜並木があり、夏目漱石の小説の舞台にもなったところでもあった。その柔道場の脇に、小さな6坪ほどの木造のバラックがあり、これが部室であった。」とある。

夏目漱石の小説「三四郎」には、明治時代に大学の陸上運動会が開かれた芝生の運動場として登場する。御殿と池も出てきて、現在のグラウンド名と三四郎池の由来となっている。

病院側地下に立派な部室

3. 戦前～昭和57年

戦前のいつごろか不明であるが、御殿下グラウンドがサッカー場として整備され、病院側の地下に当時としては立派な部室が造られた。その後このグラウンドと部室は半世紀に及ぶ歴史を刻むことになる。

昭和14年からは関東大学1部リーグの試合にも御殿下が使われるようになった。東京オリンピック前の日本代表の練習も、クラマーコーチのもとでこの御殿下が使われるなど、東大だけでなく、多くのトッププレイヤーがここで試合や練習を行っていたのである。

前述の高山の文章には

「その後、蹴球部の部長さんであった内田祥三先生の御尽力で、グラウンドは整備・拡充され、病院側の地下にコンクリート造の部室が造られ、シャワーなどの設備もととのえられた。」との記述がある。戦後のある時期（昭和20年代後半）は第2食堂の横にあった部室を使用していた。

写真は昭和40年代後半の御殿下グラウンドの貴重な写真である。この写真にある通り、芝生でな



昭和40年代の御殿下グラウンド

く土の御殿下グラウンドこそが昭和の歴代のア式蹴球部部員の活躍の原点であった。

部室の写真がないのは残念であるが、地下の部室は、昭和58年以前に入部したア式蹴球部部員（現在の45歳以上のLB会員）にとっては、誠に思い出深き場所であり、関東大学リーグの1部・2部、東京都リーグ1部の数々の試合を戦った部員の汗と涙が詰まった場所であった。

地下に記念の屋内体育館

4. 昭和57年～平成元年

昭和57年に東大創立百年を記念して、御殿下グラウンドの地下に屋内体育館を建設することが決定された。翌年夏に工事が開始され、秋のリーグ戦からグラウンドが使用不能となる。昭和58年の京大戦が御殿下グラウンド最後の試合であった。そして、埋蔵文化財の出土のため昭和62年まで4年間の長きにわたり、延々と考古学的発掘調査が続くことになる。

昭和57年11月30日付で、西本晃二ア式蹴球部部長、渡辺洋三LB会代表幹事名で平野龍一総長宛に提出した「本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書」には、以下の2点が要望されている。

- 〈1〉工事期間（20ヵ月）中の農学部グラウンドの改修（土の入れ替え、整地等）、仮部室の設置（50名分）
- 〈2〉記念館建設後、屋根を埋め戻して再びグラウンドを作るときの整備
 - ①御殿下グラウンドの全面的改修（105m×68mへの拡張、土壌改良、スプリンクラー、夜間照明、ネットフェンス、観客席等の設置）
 - ②本格的部室の建設（シャワー、トイレ、トレーニングルーム、ミーティングルーム、対戦チーム用控え室等）

しかしながら、大学側が整備したのは、夜間照明だけは設置されたものの、正規の試合ができない狭い石ころだらけの農学部グラウンドと小屋同然の仮部室のみであった。

昭和60年12月19日付の学生課長宛の要望書には、当時の劣悪な状態がしっかり述べられている。（破傷風の恐れのあるグラウンド、あまり湯が出ないシャワー2基、破れた窓ガラスなど）

この「苦難の時代（昭和58年～63年）」にサッ

カー部は一度は都リーグ2部に降格しながら、2年で1部復帰を果たしている。

昭和62年に考古学的調査が終了し、いよいよ記念館の建設の段になり、屋根を埋め戻して復旧するはずであった御殿下グラウンドを「人工芝化」という、寝耳に水の大学側からの提案があった。当時の人工芝は劣悪であり、脚に障害を起こすことから、世界的にはサッカー場を始め運動場への適用を止める動きがあった。しかし大学側は単なる記念館の屋根として管理しようとして、人工芝化を強行した。写真は完成した御殿下グラウンドである。短い人工芝に砂を入れた代物で、サッカーにはまったく向かないものであった。



人工芝化されたがサッカーには全く不向き

ここに至り、LBと現役は熟慮の末、農学部運動場にホームグラウンドを移す決断をした。

昭和62年5月15日付の「本郷記念館（仮称）建設に伴う要望書（三）」サッカーグラウンドの農学部キャンパス移転に関する要望（東京大学本郷記念館に関する懇談会・関口座長宛）で、農学部グラウンドの全面改修（115m×73m化、照明灯増設、シュート板他）と新部室の建設の2点を強く要望している。当時の西本部長（昭31卒）を先頭に、LB総力をあげての大学側との折衝の過程が「闘魂」4号に書かれている。今、読み返してみても、大変な交渉であったことが判る。

グラウンド改修は、大学から6,000万円の予算を引き出し、昭和63年5月に完成した。農学部運動場を縦115m、横73mに拡張し、シュート板、夜間照明、散水設備などを備えた公式戦が可能なグラウンドである。その年の「五月祭」（昭和63年5月28日）にグラウンド開きを盛大に行った。

一方、部室についてはLB会として寄付を募

り、恒久的な部室を建設しようとの機運が盛り上がった。昭和62年6月15日におそらくア式蹴球部史上初めて、各年代の代表LBが部室建設委員会の初会合に参集した。その場で募金額を当初案の600万円から1,000万円にアップし、満場一致で「新部室建設」を誓い合った。大学の「百年記念事業委員会」から1,400万円を引き出すことにも成功し、計2,400万円の予算を準備した。あの会合での参加メンバーの意気込みや熱い情熱は、今も記憶に新しい。その後の幾多の試練を経て、現在のLB会の組織・活動があるが、あの会合こそが原点であったと今更ながらに実感している。

農学部に2階建て新部室

平成元年～平成16年

平成元年3月、実に6年ぶりに、公式戦のできる農学部のホームグラウンドと現在の部室の建物が完成した。下の写真は平成20年に撮影したもので、新築から20年を経てツタがからまり、大きな樹木に囲まれて少し風格すら出てきた。

農学部キャンパスにおいて、公式戦のできるグラウンドと2階建ての素晴らしい部室を手に入れたア式蹴球部は、都リーグ1部に数年間踏ん張ったが、その後、2部、3部Bに低迷することになる。当時の農学部グラウンドは、広さこそ確保されていたが、整地をしてもすぐ凸凹になるし、レンガやガラスの破片が混じっていて、管理は大変であった。

平成14年ごろ、地震研究所の拡張および法科大学院の建物が建設される計画が持ち上がった。影本部長（現部長、昭51卒）以下は対応に苦慮し、運動会と協議した。窓口が総務担当理事の小林寛道氏（現在の東大柏Ⅱキャンパス「生涯スポーツ健康科学研究センター」客員教授）で、同氏のご尽力により再び御殿下グラウンドへのホームグラ



建築後、20年たった部室の建物

ウンド移設が実現することになる。改めて小林先生に感謝申し上げたい。先生よりお聞きした経緯は次の通りである。

農学部グラウンドの一角に、地震研究所および法科大学院の建物が建設される計画が持ち上がった。(財)東京大学運動会企画委員会は、キャンパス計画が安易に変更され、運動施設内に建物が建てられることに強く反対した。運動会総務担当理事小林寛道が窓口となり、農学部グラウンドに関する利用者への説明、およびア式蹴球部をはじめ、農学部グラウンドを利用する団体や個人からの意見聴取や希望に関する説明会を行った。また、ア式蹴球部のホームグラウンドについて、御殿下グラウンドに復帰する案を作成した。

ア式蹴球部の御殿下グラウンドの移転に関して、大学側に次の妥協案を提示した。

1. 夜間のグラウンド利用が出来るように、夜間照明を設置する。
2. FIFA公認の人工芝グラウンドを整備する。
3. 部室を整備する。

当時、人工芝のサッカー場には反対があったが、良質の人工芝が開発されており、FIFA公認の人工芝があることを説明し、種々検討した結果、人工芝化が認められた。

夜間照明については、病院がまぶしいと反対する意見があったが、前年には新しい病棟が完成して、グラウンド側には病室がないなどの理由をあげて、反対意見に対抗した。ボールが飛んできて危いという意見には、フェンスを設けることで、安全を期すことが出来ると説得した。その他、農学部グラウンドの存在価値に絡んで、もろもろの意見が出たが、利用状況の調査結果などデータをあげ、一つひとつ反証し、当時の御殿下グラウンドを、夜間照明つきのグラウンドに整備しなおすことによって、農学部グラウンドの縮小に対応できる案を作成して、大学本部の理解を得た。

グラウンドを守る側に立った大学側の正式の機関がなかったことを指摘し、大学内に学生の厚生施設や運動施設の管理運営に関する委員会の設置を提案し、平成17年に学内委員会が設置された。



新しい人工芝に改装されたグラウンド

21年振りに御殿下に戻る

平成16年～現在

このようにして、天然芝に劣らない本格ロングパイル人工芝のピッチと新型の照明設備を備えた、全国の大学でもトップクラスのグラウンドが平成16年3月、長谷川体育施設(株)により、御殿下に完成した。この人工芝敷設に当たっては、同社に勤務している御殿下少年サッカースクール出身の竹内俊裕さんが、御殿下への思い入れもあって受注に成功し、工事に当たってくれた。

新生御殿下グラウンドのこけら落としとして、平成16年4月1日にア式蹴球部対東大ダックス(東大の教職員を中心としたチーム)の試合が行われた。この年、実に21年振りにホームグラウンドを御殿下に戻して秋のリーグ戦を戦い、見事に東京都リーグ2部への復帰を果たした。

農学部グラウンドは現在、学生、教職員のスポーツを楽しむ場として盛んに利用されている。

最近の現役諸君は、充実した部室と素晴らしい人工芝の御殿下グラウンドで4年間のア式蹴球部生活を送ることが出来る訳だが、これもひとえに90年の歴史とその間の先輩たちの努力の賜物であることを忘れないで欲しい。

(吉澤伸明、吉野元章、大正期は浅見俊雄)

(注) 昭和57年～平成元年までの新部室建設については「闘魂」4号(部室建設記念号)に詳述されている。「闘魂」1～5号は東大LB会のホームページのアーカイブスで見ることができる。

御殿下少年サッカークラブ 思い出の記 ——

御殿下グラウンドは、一時期をのぞいてずっと東大ア式蹴球部のホームグラウンドであった。しかし現役の練習、試合に使われただけでなく、ア式蹴球部周辺でのさまざまなサッカー活動の場でもあった。その中から特に部との関連の深い活動として、大学の学外開放を意図して作られた「御殿下少年サッカークラブ」と、東大職員のサッカークラブである「ダックス」の成り立ちからいまに至る足跡を、関係者にたどっていただいた。

何もかも楽しかった

私にとって人生の発端

スクールOB 竹内俊裕

昭和40年当時、本郷へは各国鉄の駅より都電に乗り、赤門前もしくは龍岡門前で下車、ある者は三四郎池から山を越えて、ある者は龍岡門前の和菓子屋さんで冷たいチェリオを買って、トボトボと御殿下グラウンドに向かった。

私は昭和31年生まれで、当時小学校4年生。御殿下グラウンドにサッカースクールが開校し、最初に生徒として白羽の矢が向けられた文京区内の国立大附属小学校3校の一つ、お茶の水女子大学附属小学校のサッカー部の一員であった。当時、東京オリンピックの影響で国際化に目覚めたばかりの東京では、そこいら中の商店街には万国旗がまだ飾られていた。

学校では体育の先生に勧められてサッカーを始めたが、それは単に授業でのサッカーであり、それはそれで、それまで王、長島を追いかけていた子供たちには、誰でも得点を入れられて一瞬でヒーローになれるサッカーは新鮮で楽しいものと映り、サッカーを教えてくださいと体育の先生に感謝をしなくてはならないと思っている。

そんなころ東大で少年サッカースクールを始めると聞き、当時民間でサッカースクールなんてなかった時代だったので、これまた新鮮、Good sounds! すぐさまサッカー部仲間と入会した（と言っても、なんせ小学生ですから会費を払えるわ

けはない。結果、母親のお仕事に……）。

スクールの名前も開校当時は「東京サッカー友の会」だったと思うが、後に現在まで続く「御殿下少年サッカークラブ」になった。スクールは毎週日曜日に開かれ、渡された会員証の表紙の裏に出席のハンコを当時クラブのマネージャーだったクロちゃん（旧姓黒崎さん。当時とてもチャーミングな女子大生、だったか？）に押してもらっていた。

スクールの内容は基礎的な練習が大半で、浅見先生の教え方がまた理論的であったことを覚えている。例えば、足の内側外側でのトラップでは



御殿下グラウンドでの練習風景

「球が来たら足で入射角と反射角を考えた壁を作って」とか、ヘディングの練習では「ブランコに乗って上に行った時にあごを引く。前に行った時にあごを前に出す。その要領でボールに書いてある文字が見える位まで目を開いておデコに当てるように」とか、などなど…。この理論的なスクールでの「お勉強」が当時は学校とは違っていた。



検見川グラウンドで日本代表選手といっしょに

すんなり身体や脳にしみこんで、自然に数学や物理がなんとなく好きになった少年は私だけではないと思うが、現在設計を天職にしている私には「人生の発端」と言っても過言ではない。

スクールは当時は石ころがいっぱいのグラウンドで行われていて、時々生徒が一行になって石拾いをした覚えもある。そんな土のグラウンドだったため、雨が降ると中止になることもあり、着替えをしていた御殿山の木陰で雨を恨んだこともあった。一度、朝集まってから雨になってしまった時に、農学部の方にあったボロ部屋（失礼！ア式蹴球部の合宿所だったらしい）に連れて行かれ、フィルム鑑賞会をしたこともあった。フィルムの内容は白黒の外国のサッカーの試合（確かドイツや英国の試合だったと思うが）で、当時テレビで放映が始まったダイヤモンドサッカーと同様の、日本では見たことのないパワーと速さと技術力に圧倒される内容であった。今思うと「農学部の小屋で見たフィルム」と「テレビのダイヤモンドサッカー」と「メキシコ五輪で全日本が銅メダル」の3本セットが日本におけるサッカーの夜明けであり、私にとっては人生のほとんどの登場することになる「サッカー」への目覚めであった。

スクールでもう一つ思い出に残っているのは合宿である。修学旅行でさえ大騒ぎする年ごろであったため、大好きなサッカーで自宅以外で皆と遊べるとなれば、その後のことはご想像通りの大騒ぎだった。合宿地となったのは、検見川グラウンドや東京五輪で選手村として使われていた建物を改修した国立オリンピック記念青少年総合センターであった。検見川グラウンドではちょうど全日

本が合宿中で、現在では考えられないことだが、代表選手から直接指導を受けることが出来た。シュート練習は転がしてもらったボールを蹴る練習で、ゴール裏の林に「宇宙開発」（当時しきりに言われていた言葉）して、ボールをなくす子供も結構いた（確か私もタチカラの張り皮のボールをなくした記憶がある）。

国立青少年センターでは、当時黄金期を迎えようとしているバレーボール男子の合宿中で、横田、森田、大古の3大人気選手や、今は亡き猫田、南両選手が体育館で大声を上げて練習に取り組んでいるのを見学し圧倒されたこともあった。当時2m近い身長の人珍しく、ジャイアント馬場さんぐらいだったと思われるが、近くで見ると赤い短パンが目玉で、顔ははるか2階位の上にある感じだった。日本人でも背が大きくなるんだ、と思った瞬間であった。

さて、色々と御殿下の思い出をたどってみると、その当時起こった世事や自分に起こった出来事もよみがえってくる。昨晚の夕食の内容も忘れてしまうのに、何でこれほど出来事や場面、音や臭いまでもが一瞬にしてあふれ出てくるのか。

ただ確実に言えることは、43年前から日本にサッカースクールが存在し、多くの子供たちと共にサッカーを育て、現在の三浦カズ、中田ヒデ、俊輔らを育てた日本サッカー界の礎の一つになった、ということである。また、その少年サッカーを支えてこられ、東大ア式蹴球部の90年の歴史に携わってこられた方々に深くお礼を申し上げ、不滅の伝統を守り続けられますようお願い申し上げます。
(長谷川体育施設勤務)

現役部員が全面協力

合宿など企画して成果

戸荻晴彦

東京大学に教員としてお世話になったのは、昭和38年から平成8年までの実に38年間もの長きにわたるものであった。しかも一生をサッカーに賭けようと決断していた自分にとっては恵まれた環境で過ごせたことにまず感謝したい。

知遇を得たのは、初期には竹腰重丸先生（教養学部講師、以下敬称略）が、その後の長期間には浅見俊雄（教授→国立スポーツ科学センター長）、菊池武道（助手→千葉大学教育学部教授）、北川薫（助手→中京大学体育学部教授・学長）、高橋孝太郎（助手→埼玉大学教育学部助教授、在オーストラリア）、そして大橋二郎、兵頭圭介（ともに教養学部助手→大東文化大学スポーツ・健康学部教授）と、サッカー絡みの多くの指導者、教育者、研究者に遭遇できた。加えて、教養学部保健体育科は加藤橋夫主任教授を中心に日本の体育・スポーツ界をリードしていくといった気概に溢れた人材が揃っていたのも幸運であった。

仕事の面では、スポーツ科学の黎明期であった東京オリンピック直前がスタートであったが、サッカーだけではなく、幅広く競技力向上に関連する研究、指導者育成などの事業に携わることができた。しかも大学時代の監督であった太田哲男先生（故人、順天堂大学教授）が日本蹴球協会（当時）の科学研究関連の責任者として発足時から活動の場を与えてくれるという幸運にも恵まれた。

東京大学ア式蹴球部コーチに就任したのは、昭和43年に監督であった浅見先生からの誘いだった。当時、東大に在籍しながら東京都立大学サッカー部監督をしていたが、授業でも顔なじみの学生がいる東大で指導することにした。蹴球部は藪内主将を中心に関東大学リーグ1部復帰を最大目標にしていた時代で、あの残念であった中央大学との1部入れ替え戦などについては誰かが書いてくれるとの想いで触れない。

そして昭和48年からは、非常勤講師として勤務し、また生まれ育った地元の埼玉大学からサッカ

一部監督の依頼を受け、熟慮の末に受けることにして、東大のコーチは辞任した。この判断は中心選手である教育学部学生がその後に教育者として埼玉サッカーの強化に携わることを期待してのものだった。

しかし、昭和44年から浅見、菊池先生と始めた「御殿下少年サッカークラブ」は、何となく兵頭先生（部OB）にバトンタッチするまで蹴球部との関わりを深いものにしていった。このクラブの立ち上げは今にまで続いているきっかけになったものとして、その成り立ちについて少し書きとめておきたい。

昭和43年は、日本サッカーにとっては忘れられないメキシコオリンピック3位入賞で、国内は第1期サッカーブームに沸き、少年サッカークラブが雨後の竹の子のごとく誕生した時代であった。当時の「東京サッカー友の会」に関係していた牛木素吉郎氏（部OB、当時読売新聞）から、友の会の少年たちを対象としたサッカースクールの指導依頼が浅見先生のところに舞い込んだ。われわれが想い描いていたヨーロッパのスポーツクラブ



ヘディングの練習。指導は日本代表の湯口栄蔵選手。

と重なるところもあり、運動をする場の少ない都心の子どもたちに御殿下グラウンドを開放し、身体活動の場を与えようということで決断した。今考えてみると、文部科学省が推奨している「総合型地域スポーツクラブ」の先取りのようなものであったともいえる。名称は、東京大学ア式蹴球部OB会組織である御殿下クラブの下部組織的な考え方として「御殿下少年サッカークラブ」ということで発足することになった。

この間の活動について詳しく述べる紙数はないが、特筆したいのは現役諸君の協力であった。彼らは単に子どもたちにサッカーを教えるということだけではなく、御殿下少年サッカークラブ設立

の主旨に賛同して時間を割いてくれた。午後からの厳しい練習があるにも拘わらず、武田主将以下、八林、吉崎、小柳、松岡などなど最上級生、しかもレギュラー組が率先して出てきてくれ、ラインを引き、子どもたちの指導まで皆で手伝ってくれたことには感謝の念に堪えなかった。終わったあとの正門前「弥生」での昼飯も楽しみであったことも忘れられないが。

初期の時代は駒場での体力・スキルなどの各種測定、日本体育協会スポーツ診療所における医学的検査などのパーソナルチェックを行い、年間行事としては「初蹴り会」「検見川夏季合宿」「日本代表とボールを蹴る会」など手のかかることも企画した。それなりの成果が得られたのも蹴球部全体のサポートがあったからこそ今に引き継がれているものと思う。

そのころの子どもたちや学生コーチ、女子マネージャーたちが、浅見先生や私の「古希」を祝ってくれたことを「思い出ばなしの一つ」として結びたい。

(平成国際大学教授。昭和38年～平成8年、東京大学教養学部保健体育科に在籍)

[参考文献]

浅見俊雄 東京サッカー友の会「第2回少年サッカースクール」指導書 1969

戸荻晴彦 御殿下少年サッカークラブの現状と課題 体育の科学、21巻11号、1971

会員 200 人超した時も

「まったり」した伝統守る

兵頭圭介

37年前のことになる。4月にサッカー部に入部して最初の土曜の練習のときのことだった。最後のインターバル走が終わって解散前に全員が集合した。翌日の予定や部費徴収などの諸連絡のあと、マネージャーの宮路さん(昭47卒)が「少年スクールのコーチ募集だが、だれか希望者はいないか」と言った。高校生のときから地元のサッカースクールを手伝っていたこともあり、何の抵抗もなくすぐに手を挙げ、サッカースクール(御殿下少年サッカークラブ)をお手伝いすることにな

った。

翌日言われたとおりに朝9時半に着替えてグラウンドに出ると、「小学1年生を担当するように」と言われた。子供たちがすぐに飽きてしまうことや、親に言われてしかたなく来ている子が多いことなど、前に手伝っていた所と共通点が多かったのであまり戸惑いはなかった。戸惑ったことといえば、子供たちの着ているシャツ(ユニホーム)の胸のマークの由来が不明だったこと(後で天狗の団扇だと判明)、子供たちがサッカーそっちのけで砂遊びを始めることまでは予想できなかったこと、子供たちの「お坊っちゃま指数」が高いなと感じたこと(何しろ小学生の履いている靴の方がコーチの靴より上等だった)くらいであろうか。

受け持った1年生の中にサッカーは上手だが、とてもおとなしい浅見という子がいた。浅見監督のご長男の浅見重雄さんだということは後でわかった。2時間の練習をなんとか(ダマシダマシ)終えて、どこかでパンでも買おうかと思っていたら、『『やよい』に行くから一緒にこい』と言われ、浅見先生、戸荻先生、菊池先生などのそうそうたる方々と一緒にさせていただき、なべやきうどんを頂いた。勘定を払う段になって先生方から「(払わなくて) いいよ」と言われてうれしかったのを覚えている。

アルバイト代は1回1000円だったように記憶している。当時、学費は年間1万2千円、学食のカレーが70円だったから、金のない学生にとっては大変いいアルバイトだったが、競争率が高いわけでもなく、応募するのはいつもおなじような、金のなさそうなメンバーばかりだった。子供たちがなかなか言うことを聞かないことと、日曜は午後2時から練習があることで、少しでも体を休めたいという気持ちの人が多かったからかもしれない。コーチの常連は手島さん(昭和47卒)、西澤さん(昭和48卒)や私と同期の遠藤、吉澤、大高などで、自分が上級生になってからは茅野、杉浦、堀井、池森(昭和51卒)、小野田(昭和52卒)などが手伝うようになった。

アルバイト代はグラウンドで浅見監督から頂くことが多かったが、駒場キャンパス(教養学部)の体育科に受け取りに行くこともあり、それが度重なると、「また来たか」と、体育科の先生方に顔を覚えていただくまでになり、実験補助のアル

バイトまでさせていただいた。自分の最初の就職先が東大教養学部体育科だったことを思えば、このころからご縁があったのかもしれない。

夏休みには合宿があり、検見川や湯の丸高原などに行ったのを覚えている。言うことをきかない子供たちと終日一緒にいるわけだから重労働ではあったが、怪談をすると大人しくなったり、寝室を見回りに行ってみると低学年の子が泣いていたりと、普段見ることのできない子供たちのかわいい一面も見ることができた。

大学を卒業してからもサッカースクールを手伝わせていただき、その後、東京大学教養学部体育科に奉職したこともあって、1年ほどブランクがあったほかは、ずっとサッカースクールを手伝わせていただいた。表計算、ワープロ、データベース、ホームページ編集ソフトを使えるようになったのもサッカースクールに関わっていたからで、そうでなければ自分のような人間はいまごろパソコン難民になっていたかもしれない。

サッカースクールは御殿下で活動をはじめてから、来年で40周年になるはずである。その間有名選手といえば早稲田でレギュラーになり、インカレ優勝メンバーに入った佐々木功さんくらいしか記憶にないが、戸荻先生のお嬢さんが女子マネージャーをしてくださったし、元会員（生徒）だった佐々木務さん（佐々木功さんのお兄さん）は現在養護教諭という激務のかたわらチーフコーチとして活躍しておられ、前述の浅見重雄さんはお子さん連れでコーチとして参加してくださっている。また青田（黒崎）知子さん、青田直子さんは親子2代でマネージャーを務められた。さらに、創設当時の会員だった竹内俊裕さんは長谷川体育施設に勤務され、御殿下グラウンドの人工芝張り替えにかかわられた。

かつては御殿下が文京区唯一の少年サッカーチームということもあって、200人以上の会員を抱え、練習も2部制にしたこともあった。しかし文京区でも小学校や幼稚園などを母体に多くの少年サッカーチームができ、今年3月に飯田橋の小石川運動場で行われた文京区の少年サッカーの大会には8チーム（10チームを超えた年もあった）が参加しており、少年サッカー普及の担い手としての御殿下少年サッカークラブの使命は終わったといえるかもしれない。しかし、勝利指向で上手な子を優遇し、サッカーするのは子供だけで、保護

者の役割は応援か当番というチームが多い中で、遊び中心、休憩自由、上手下手にかかわらず試合出場時間は均等という創設以来の伝統を守っている。また最近は人工芝という環境もあって、子供と一緒にゲームに参加される保護者の方も増えて、スポーツを通じて親子がふれあい、ともに育っていく貴重な場にもなっている。

浅見先生たちのご努力が実って日本におけるサッカーの普及は一応のレベルまでに到達したので、御殿下のような「まったり」したクラブも1つくらいあってもいいのではないだろうか。御殿下少年サッカークラブが今後とも存続してゆくためには、運営担当者の世代交代が必要であろう。すでに前述したように、元会員や元会員のご父兄などが新たな担い手として活躍されている。また、山口壺和さん（平成3年卒）や手塚耕治さん（昭和61年卒、平成16年没）の奥様とお子さんのように、浅見先生や私以外の東大OBやその関係者の方も参加されるようになったが、さらに多くの東大OBに加わっていただきたいと考えている。今は仕事で忙しい方も、いずれ第1線から退く日がくるはずであり、その暁にはぜひ日曜の午前8時半に御殿下グラウンドに（お孫さんの手を引いて）おいで下さり、御殿下少年サッカーの運営に携わりつつ、第2の人生を豊かにお過ごしいただきたいと願うものである。

東大ダックスの横顔

職場の「チビ蹴」が成長

泥蹴会・一橋OBと定期戦

鶴沢聖治

◇ダックスの誕生と名の由来

昭和23年、横山陽三さんが東京大学学生課（現学生部）へ奉職して、職場の若い職員を集めて二食の横のバスケットコートに小さいゴールを置き、集まってきた職員を紅白に分けてゲームをしたのが始まりです。このゲームは「チビ蹴（チビシュウ）」と言っていました。チビ蹴を始めた人たちは、現在盛んになったフットサルの原点は「チビ蹴」だと自負しています。

まだサッカーが今ほど社会に認知されていない



横山さんの送別試合のあとで

時期、学生部の職場内で始まったチビ蹴が、時がたつに従って対外試合を行っていくようになりました。そこでチーム名が必要となり、当時学生部にいた平田久雄さん（のちに教養学部体育科教授）が「ダックス」という名前を提案したところ、割りとスンナリと決まったようです。その心はと言うと、技はアヒルが歩くがごとく、「ヨタヨタ、ヨチヨチ」なのに、口はいつも「ギャーギャー、ガァーガァー」とうるさく議論をしていた、と言うことのようにです。ここに「東大ダックス」の誕生です。

◇社会人リーグへ船出して

毎日、昼の休憩時間に行われていたチビ蹴に、他の部局や学科の若い職員が参加してきて、多くのサッカー仲間が集まるようになりました。当時施設部にいた黒子真吾さんの働きかけで、昭和47年に東京都社会人リーグに「東大ダックス」として加盟することができました。

東京都社会人リーグに活躍の場を移したダックスのメンバーは素人集団に毛が生えたようなもので、戦術も戦略もなく戦っていました。それで少しでも経験者のいるチームには勝てなく惨めな思いをしたものです。そこで、昭和47年の秋、ダックスが検見川総合グラウンドで合宿をしている時に誰か指導してくれる人はいないかと手塚重郎さんをお願いしたところ、指導に来てくれた方が、なんと岡野俊一郎さんで、翌48年の秋に来てくれた方は浅見俊雄先生でした。おかげさまで東大ダックスは、今でも御殿下グラウンドで「チビ

蹴」をやりながら東京都社会人リーグで活動を続けています。

◇横山陽三さんの退官を迎え

昭和53年に横山陽三さんが定年退官を迎え、その功績をたたえてダックスにかかわった多くの仲間たちで送別試合を企画しました。3月4日、ダックスのメンバーを紅白に分けて御殿下グラウンドで試合をしましたが、その時の主審は横山さん、副審は浅見俊雄先生と氏平佑輔先生の両氏という前代未聞の豪華な審判団でした。

写真の中央付近で審判服を着ている3人が（左から）浅見先生、横山さん、氏平先生です。

東大ダックスが東京都社会人リーグに加盟したことで自主的に練習をする仲間が出てきました。その当時の東大サッカー部のメンバーが、後に泥蹴会を作られたと聞いています。

泥蹴会の方々が卒業して社会人になって何年かして、池森さんから「11月23日に泥蹴会メンバーが集まるので親善試合をやりませんか」と声をかけていただいたのが、泥蹴会と東大ダックスの定期戦の始まりでした。途中から一橋大サッカー部のOBも加わり、三つ巴で定期戦をやることになりました。ダックスは万年3位に甘んじていたのですが、2006年に待望の優勝杯を手にすることができました。そのときのダックスの仲間の喜びようは大変なものでした。しかし翌年には再び泥蹴会に優勝杯を持っていかれてしまいました。また今年から優勝杯を取り戻すためにも昼休みの「チビ蹴」に励もうと思っています。（東大ダックス）

部長・監督 それぞれの思い

幅広い多様化のお薦め

面白いプレーを目指そう

部長(1982～1990) 西本晃二

ノコさんのご葬儀に出て（エビさんのだったかも知れない。どちらにも伺ったので判らなくなってしまった。竹腰さんは部の大先輩でいろいろ教えて頂いたし、海老原さんは僕が初めて東大チームのメンバーとして試合に出た時のキャプテン）、それがまたちょうど長い間サッカー部長をされた経済学部の安藤先生が年度末に定年退官される年に当たっていたので（これまたハッキリしないのだが）、岡野さんだったかを捕まえて、「安藤さんの後は、誰が部長なんですかね？」などと、我ながらばかな質問をしたものだ。そうしたら「お前じゃないの？」と逆に聞かれてビックリ仰天！だってまだ若輩の助教授だったし、それに同じチームの仲間で大学に残った者には、なんといってもサッカーをやり続けている浅見もいることだし、僕にお鉢が回って来るなどとは思ってもみなかったからだ。

部長勤めはなんと十数年

それになにしる僕は大学に入った昭和27年はサッカーをする気がなく、部に入らなかった。ただ秋の新人戦で教養学部で11人の面子がそろわず、「助っ人」に雇われてそのままズルズル。当時は「正月大会」と呼ばれていた全国大学選手権の第1回大会に出たのが東大チームの一員になった始まりで、しかもその大会でチームが優勝して今さら抜けられなくなった。その上、4年目は学部を終えて大学院に行くので、その準備のためプレーしなかったという、頭ナシ尻切れトンボの変則的な部員だったからだ。だから「絶対に前だ」と浅見を推したのだが、「俺は体育にいるからお前がいい」と逃げられ、どうしてもお許しがなくて

部長を仰せつかり、なんと十数年も勤めさせられたという次第なのである。

当初、監督は南谷君だったが、間もなく転勤。後任に名乗り出たのが平林君で、「大変だから止める」と言ったのに、「イヤ、どうしても」と買って出た。ところが、これがまれに見る伯楽で、「勝たなきゃ話にならん！」と秘術を尽くした。実際その采配の下、関東リーグ復帰の一手手前まで行ったのだが、最後は千葉大に敗れて復帰は果たせなかった。

ところがそうこうする内に、今度は東大創立100年記念事業の一環として御殿下グラウンドの地下に体育館を建設、上を人工芝で覆うという話が持ち上がった。「創部以来の由緒ある場所を動くわけにいかぬ」と頑張ったが、大学「運動会」側は「全学決定だからどうしようもない」と冷たいもの。OBの手島君や吉沢君と切歯扼腕したが、いかんともなし難かった。しかも工事のため数年間はグラウンドが使用不可能で、一度も御殿下でプレーする機会のない部員も出て、いまだに心が傷む。かつ当時の人工芝はまだ不完全なもので、本格的なプレーは火傷その他の障害につながる恐れがあり、結局伝統の本拠地を捨てて、農学部の野球場の隣にグラウンドを移し、部室も作るということになり、OBの方々にも寄付金をお願いしてご迷惑を掛けることになった。

いっぽう世の中も変わり、いわゆる伝統的な「部活」よりは、気楽な「クラブ」型サッカーを楽しむ学生が増え、同好会に選手が流れる傾向が目立つ。でもこれは、あながち「けしからぬ風潮」ではなく、少子化のあおりを食らい、スポーツで客寄せをせねばならぬような学校ならいざ知らず、東大なぞはサッカー好きの者が集まり、選手たちが「敵の鼻を明かしてやろう」（試合なんだから、勝つ方が負けるよりは面白いに決まって

いる)という気になったら、自分でどうすれば相手よりうまいプレーが出来るか頭を使い、いくらでもきつい練習をしたらいい。ただしそれは、あくまでも「面白い、良質のプレー」をするため。「勝つ」のはたまたまの結果で、目的ではない。

また各人の個性と体力に応じて、うまいならうまいなりに、下手なら下手なりに、かつ本人にも、見ていても「面白い」サッカーをする場になってもいいのではないかな。そう思って平林君の後を引き受けてくれた吉田君と相談し、マネージメントを強化して、いろんなレベルでの試合を、それも出来るだけ多く取り、女子チーム（こちらは東大の女子学生が勉強ばかりで人が集まらなかった。今ならなんとかなるかも知れない）もと、いろいろやってみた。

「勝ち」にこだわりすぎるな

実はこれはナショナル・チームにも当てはまることで、わが国のスポーツが一般に「型」にはまって、自発性のないものになっているのは「勝ち」にこだわり過ぎて、プレーという「過程」を見ないからだと思う。とくにチームスポーツにこの弊が強く、個人競技では各人の特徴を伸ばして国際的に通用する選手が出て来ているのを見ると、いっそうそういう感じがする。次の試合に勝つかどうかといった短絡的な目標ばかりでなく、まず「急がば回れ」式に、選手一人ひとりが個性に合った「より良いプレー」をし、同時にチームゲームだからメンバー間の連携が成り立つようなサッカーをする環境を作って、各人が自分のサッカーをするように持って行く時がそろそろ来ているのではないかな。その先鞭を東大がとってみてはいかがなものだろうか。

ビッグクラブ化の夢も

御殿下の地の利を活かし

部長(1997年～) 影本 浩

いつから部長を引き受けたのかよく覚えていないが、サッカー部出身で学内に残っている数少ない者として白羽の矢が立ったらしい。元来引込み思案で、「すき焼き」などを囲んだときには肉を食べ損ねてしまうような性格で、「長」とつく

役割には子供のころからあまり選ばれたことがなく、私を部長に選んだOBの方々の期待には沿えてはいないと思うが、一応私なりに部長の仕事は「部の活動に関わる事項についての大学内外での交渉」「OBや監督、コーチへお礼を述べること」「練習や試合を時々見に行くこと」などであろうと考えてやってきた。

部長在任中の大きな出来事で最初に思い出されるのは、当時練習や公式試合に使っていた農学部グラウンドが大学の施設建設によって使えなくなる見通しになったことである。幸いこの時は当時の運動会の幹部であった小林寛道先生や運動会に関わる事務方の方々の大変なご尽力で、御殿下グラウンドに立派な人工芝(FIFA公認)と夜間照明をつけてもらい、サッカー部の練習や試合に優先的に使えるようにしていただくことができた。

心強いOBの支援に感謝

このような時こそ部長の出番と最初は意気込んでいたが、結局私はうろろうしてただけに終わってしまい、改めて部長職には向いていないなと感じたものである。

人工芝と夜間照明をそなえたグラウンドを東京都内のど真ん中に持っているサッカー部は、関東リーグの強豪校でも例がなく、このグラウンドでサッカーをしたいために入ってくる新入部員も少なくないのではないかなと思われる。グラウンドが立派で交通の便もよいということで、公式試合も御殿下グラウンドで行われることが多く、ホームの利を大いに生かすことができている。

また昨年にはOBの有志の方々の非常なご尽力によって、OB会が法人化され、部活動へのOB会からの財政的支援の強化、OBと現役一体となつての各種行事の企画、実施などを行っていたいいる。

東京大学のサッカー部にたまたま非常にうまい選手が入ってきて一時的に強くなることはあっても、関東の強豪の常連校になることは難しいであろう。一方でOBの方々が各方面で活躍されているという東京大学の人材力の大きな強みを生かして、これらOBの方々の知恵やご支援をいただいて、OB会が将来的には欧州のビッグクラブのようなクラブ組織になっていけばとの夢も広がる。

最後に、物心両面でサッカー部へのご支援をいただいているOBの方々、グラウンドや施設の面で便宜を図っていただいている東京大学の運動会関係者、またお仕事がありながらボランティアで監督を引き受けていただいている監督、わずかな謝礼にも拘わらず熱い情熱を持って指導をいただいているコーチや若手OBの方々に改めて感謝申し上げます。

監督と審判で貴重な体験

女子審判員の育成も担当

監督(1965～1966年) 高田宗昌

東大のサッカーとの出会い

東大のサッカーを初めて見たのは昭和23年、灘中1年の12月、西宮球場での東西大学1位対抗戦(対関学)で、関学の鶴田(ときた)選手と神戸一中で同級だった叔父に連れられてのことであった。サッカーのサの字も知らないころのことで、どんより寒々とした初冬の曇り空、黄色くなった芝、東大の選手の白いユニホーム姿が目につく。東大は遠征疲れ(叔父がそう言っていた)のせいかで敗れたが、試合後の「関学 フレー フレー フレー」と言いながら、片手を3回振るエールが子供心にシンプルで格好良く見えたのを覚えている。

翌年、サッカーの盛んだった師範学校の名残のある「東京学芸大学東京第一師範学校付属世田谷中学校」に転校し、ボールを蹴ったのがサッカーとの出会いである。昭和26年に前身が旧制府立(都立)高校の尋常科だった都立大学附属高校に進んだ。部室に旧制高校時代の先輩が「サッカーは棘のあるチューインガムか。噛めば噛むほど味が。プツと捨てれば未練が残る」などと書いた部誌がまだ残っていて、パンカな泥臭い汗臭いサッカーをした。

その高校の体育教官に、当時、東京教育大学サッカー部を率い、昭和28年度の関東大学リーグ優勝を果たした監督の多和健雄先生がおられ、そのため関東大学リーグはよく観戦した。早大のエース伯井選手が両足首に真っ白なアンクルガード?を着け、グラウンドをサラブレッドのようにさっそうと走り回る姿にあこがれ、まねたりした。

東大はリーグ戦ではパツとせず、忙しくゴールを守ったGK立石選手のハンチング帽姿だけが目立ったが、昭和28年の1月に始まった「第1回全国大学選手権大会」では中央、立教、早稲田を大接戦で下し、見事優勝を果たした。国立競技場へ改装する前の神宮競技場のメインスタンドで、そのすべてを見たが、OBとおぼしき、いい年をしたオジサンたちが勝つたびに「勝った!勝った!」と子供のように大はしゃぎしていたのを思い出す。小生自身も東大進学を考えていたころだったので、知らず知らずの内に応援していたように思う。岡野選手の両腕を巧みに使ったボディパランスとフェイントが印象に残っている。

その後も東大は30年、31年1月の大会でも3位になる強さを見せ、浪人時代、駿河台の予備校にサッカーシューズを裸でぶら下げて行き、校務主任にしかられるほどのサッカー好きになっていた小生だったが、東大のサッカー(大学のサッカー)は自分の力の及ばない遠い雲の上の存在にしか思えなかった。

2年の春入部、秋に2部転落

大学1年の時は出身高校の練習に出かけてボールを蹴り、2年の春に思い立って東大ア式蹴球部の門をたたいた。上下関係の厳しい運動部を思い描いていたが、4年生から1年生まで平等にボール当番、グラウンド当番、食事当番(合宿時)をする極めて民主的な運動部であった。ボール拾いでもして役に立とうと考えていたところ、思いもよらぬことに試合に出ることになり、こんな自分が出て良いのかと思いつつ、ただ無我夢中でボールを追い、走り、蹴り、タックルやスライディングをしたが、その秋のリーグ戦は勝てず、入れ替え戦でも法政大に敗れ、東大ア式蹴球部史上初の2部転落という屈辱を味わった。その年の監督田村三郎先生(後に農芸化学科の恩師)、苦勞されたキャプテンの原靖二郎先輩には今でもおわびをしたい気持ちでいる。

その後の2年間、今から考えると1部復帰の可能性の高かった2年間、1部を目指し、横山陽三監督(五十嵐洋文主将)と大塲正雄監督の下で戦い、4年のときは主将、そして若手OBとの混成チーム(東大LB)が天皇杯3位になるという思い出まで作らせていただいたのに、両年ともに日大に敗れ、2部転落という借金を返せないまま部

を去った。農芸化学科卒論講座の住木諭介教授（当時強かったボート部の部長）に結果の報告をしたら「負けたのか。もう1年残ってサッカーをやるか」と言われた。「何かをやる決心をした以上は、覚悟を持ってやり遂げろ」ということで、そういう先生がまだおられた時代だった。

須賀敏孝監督との出会い

卒業後、大埜監督の後を継がれた須賀監督のお手伝いが微力ながらもできればと考え、昭和34年から42年まで、土曜の午後、日曜、祝日のほとんどすべて、御殿下グラウンドに通い、現役とともにボールを蹴った。

須賀監督は厳しさを口にされながらも、選手の自主性を重んじ、穏やかに選手を見守る、包容力のある監督で、選手たちは監督を尊敬しつつ、よく慕い、上野のお店（天ぷらの老舗「山下」）に顔を出して、ごちそうになったりしていた。多くの若手OBが監督を慕って、グラウンドによく姿を見せ、現在も名前が残っている「御殿下サッカークラブ」というチームを結成して、浅見先輩や小生も加わり、東京のクラブリーグ優勝、関東大会2位、関東リーグ昇格という活動をした。須賀監督には資金面でも多大のご援助をいただき、一時は「理想的なサッカークラブ」への発展を夢見たこともあった。

その間、昭和34年度（小山富士夫主将）と昭和37年度（梅村洋主将）には2部優勝を果たし、入れ替え戦に臨んだが、いずれも法政大に敗れ、1部への昇格は出来なかった。

そのころになると、大学チームでは順天堂大、国士舘大が台頭し、上位校の顔ぶれが変わり始めた。一部が段々遠くなる感じであった。

代行のつもりで監督に

昭和40年度、須賀監督のご都合が悪くなると同時に、浅見先輩も名古屋大学に移られる事態になり、長らく御殿下に通っていたためか、監督（本人は今でも代行と思っている）のような立場で、2年間チームをお預かりした。

未熟な20代の監督で、前年は2部5位、1部復帰どころか、下位リーグ転落もあるという強い危機感を持って臨んだように記憶している。

正確さ、早さ、強さをどうやって身につけさせるか、あれこれ考え、春合宿では検見川の体育館

の両端にハンドボールのゴールを置き、両端からゴールへ蹴りこむ単純な練習を徹底的にした。夏休みまではポジションの近い2人をペアにして、10～15m離れて30秒間にダイレクトパスとワントラップパスが何回できるか競わせ、グラウンドを往復するパス練習では、クラマーの言った「パス アンド ゴー」（スタートの早さ、動きのメリハリ）を強調した。

学生時代に岡野先輩からよく聞かされた「練習は試合のように、試合は練習のように」という言葉を実践し、集中した密度の高い練習をさせたかった。

チームはスピードのある坂井（GKからコンバート）、中岡、八林を前線に置き、中盤は粘り強い主将の平田、ボールが持ててパスも出せる野村と三浦、活動量のある熊谷と鳥原などで構成、ディフェンスはゾーンディフェンスのセンスのある水沢を中心に、安定感のある小柳（理）を中央に、他を41年～43年度の主将になった嶋田、小川（恭二）、藪内（現監督）などで固めた。システムは4・3・3を基本にし、スーパースターを置いたこともあった。

ゲームでは（1）FWの守備の徹底、（2）シューティングレンジに走り込んで来る相手の徹底的なマーク、の2点を強く指示した

結果は優勝した法政大と2位の上智大に引き分けの3位だった。悔いは残ったが、絶望的なゲームはゼロで、やることはやったという感触だった。

しかし、翌41年度は小生自身がある程度出来る選手が残っていると油断し、振り返って考えると、テーマのはっきりしない「分解した総合練習」をしてしまった。主将の嶋田君には申し訳ないことをしたが、結果は入れ替え戦は免れたものの、2部6位で史上最悪。基本、基礎の大切さを痛感した年であった。

審判、審判指導員など役員として

昭和37年に1級審判員に登録され、それこそ休日だけの「サンデーレフェリー」だったが、昭和50年代の半ばまで1級審判員、国際審判員として働かせていただいた。会社の年休はすべてサッカーで使った。会社の上司も「高田のサッカーは仕方がない」とハンコをついてくれた。

昭和40年にスタートした「日本サッカーリーグ

(J S L)」の開幕試合・日立対名相銀をはじめ、国内の各種リーグ、大会、国際試合としてはバングラディシュのアジアユース、マラドーナが参加した第2回ワールドユース、ペレが来たニューヨークコスモスの試合など、うまく判定できた試合はほとんどなく、主審、線審とりまぜて失敗の多い審判だったが、たくさんの思い出ができた。

審判委員会のメンバーとしても松丸委員長から高田(静夫)委員長まで6代の委員長に仕え、中でも東大OBの浅見委員長には、その現役時代から70歳の審判インスペクターの定年までご指導をいただいたことになる。まさに生涯の師であった。特に平成7年、浅見委員長のご指示で「女子1級審判員」の創設を、指導育成部長としてお手伝いしたのが思い出深い。今では、さらに成長して女子の国際審判員も生まれる時代になり、良かったと思っている。

Jリーグの発足から10年間、マッチコミッショナーとして草創期のJリーグの推移を見せていただいたし、東京オリンピック、ワールドユース、アジアユース、メキシコ五輪アジア予選などでは役員として運営に携わった。夢にまでみたワールドカップは日韓大会をやじ馬で見物した。

全国に友人が出来、他校出身者を含む多くのサッカーを愛する人たちと交流し、充実した人生を送ることが出来たと感謝している。また、これらすべてが東大サッカー部に所属したたまものであり、心から大恩を感じている。

なお、私が現役の時代には横山、有馬、早川、浅見など東大出身の諸先輩が国際審判員に名を連ねていた。審判員もスペシャルレフェリーなどプロの時代になり、仕事と二足のわらじを履くことが難しい世の中になっている。審判は割りの悪い仕事で、プレーだけしていた方が面白いとの見方もあろうが、経験してみると人生に広がり加わると思う。現役諸兄から審判志望者が現れることを切に願っている。

部に栄光あれ！ 現役諸兄への注文

私が東大サッカー部に接した皆さんは偉大だった。

「一生懸命にもいろいろなレベルがある」「覚悟ができてるか」といつも言われた竹腰重丸先輩には、インステップキックの時の手の振りの小指の向きまで指導を受け、「極める」というのは

こういうことかと教えられた。

「決心したら、やらなくちゃ」といわれた大塲正雄監督には天皇杯関東予選に選手として出場された時、ペナルティエリアのすぐ外でボールを受け、ワントラップで自分の得意な形に入り、「これ、入れるよ」と宣言してゴール左上隅に蹴り込み、自信にまで昇華した技術のすごさと修練の裏付けの重要さを現場で見せていただいた。

「キャプテンのあり方、条件」「後継者をきちんと作っておく重要性」を教えて下さったのは岡野俊一郎先輩で、卒業後の会社生活でも常に思い出した。

天皇杯で一緒にした諸先輩も、皆さん「この人となら、同じチームで仕事をしたい」と思わせる方々ばかりだった。中でも、キックは時々あらぬ方角に飛ぶこともあるが、どんな相手でも豪快な幅広いスライディングタックルで止めた海老原朗先輩は常に明快、明朗、快活で、周囲に勇気を与え、リーダーシップのお手本がそこにあるという方だった。

素晴らしい素敵な方々の輪の中で過ごせた自分は幸せだった。現役諸兄もこのような立派なLB会の一員であることに誇りを持って欲しいし、同じような立派な人物になって欲しい。

昨年(平成19年度)、暇にまかせて現役のゲームを、練習試合を含めて遠くは戸塚の明学大、熊谷の立正大のグラウンドまで出かけて観戦した。われわれのころより球扱いもフィジカルもレベルは高くなっているが、われわれが諸先輩から言われたことと同じような感想を持った。歴史は繰り返すらしい。

服部一郎前監督は「80周年記念誌 闘魂」の中で現役諸兄を「練習はよくするが、他校の選手に比して身体が固く、柔軟性に乏しく、スピードがなく、フィジカルが弱く、イメージーションがない」と分析した上で、「改善できない問題ではない」とも述べている。

服部監督と同期だったせいかも知れぬが、私の感想もまったく同じだ。今のレベルでも東京都リーグ2部校とはほぼ対等、1部の下位校にも何とか対抗できるが、1部上位校のスピードにはついていけない。でも改善できないほど現役諸兄が劣っていて、絶望的とは思わない。

1部上位校に対抗する力をつけるのは、月並みだが「練習」しかないだろう。

「出来ることだけを繰り返している練習をしてはいないか?」「一つの動作をしたら、すぐ次の動きに入らず、一休みしてはいないか?」「ボール拾いを歩いてしてはいないか?」———なんだか自分たちが現役のときに言われたことを書いているようだ。

宮本武蔵の五輪書に「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。能々（よくよく）吟味有るべきもの也」とある。皆はそれなりに頑張っているが、服部監督の言う「<よくしている練習>の中身は自分を日々向上させているか?」「出来るまで反復練習したか?」「自己満足の技術、鍛錬していない身体で安易に試合に出ていないか?」「課題を具体的に解決する方策を考え抜いたか?」「適当なうまさより野性味の方が強い!」を、いま一度かみしめて欲しい。

自分の一生懸命のレベルをよくよく吟味してほしい。東大サッカー部は他から強制された他律的な練習でなく、自律的な練習をする部である。課題の克服に妥協をすれば、敗北しかない。自ら工夫努力する、負けず嫌いの気持ちの強い個人が集まれば、試合でもっと楽しいサッカーが出来るし、東京都リーグ1部への昇格は必ず出来る。あきらめてはいけない。同時に自分に厳しくなることで人間的にも必ず大きく育つ。伝統はただ守るものではなく、自分たちでつくり出していくものだ。

現役諸兄の今年の秋の笑顔を待っている。L B会全員で90周年記念の会合でバンザイがしたい。

引き受けたが迷いつつ

理論的な指導力は足らず

監督(1978年) 古村一郎

1. 現役時代(昭和42年度～46年度)

広島から勇躍上京した。同郷の清木俊行、加藤寛の3人が入部して同期の桜井英人や小原正たちにもいくぶんなまった広島弁がひろまった。地震研裏のかなりガタのきた合宿所に1年半ほど居候させてもらい、練習後には上野の「山下」で小柳望さんたちに交じって皿洗いのバイトをさせてもらった。夜食のおかわり無制限は有り難かった。

リーグ戦にレギュラー出場できたのは5年生の時で、それまでは交代選手だったので、レベルとしては1軍半くらいの実力だったことになる。

2年生の時に大学騒動が始まり、クラス討論、デモと人並み以上にかかわったため基礎体力を向上させることが出来なかった。監督の浅見先生以下チーム歴代指導陣からは以下の3点を指導された。①ボールをこねくり回すな、②ボールをとられたら守れ、③90分持続する体力をつけろ。

2. コーチ時代(昭和47年度～48年度)

1年以上、大学騒動のため講義も受けないで、通常より8カ月遅れて本郷に進学、それから1年ちょっとで学部卒業という強行スケジュールについていくことができず、1年留年してやっとのことで法学部を卒業したが、いまひとつ学生をやった実感がないので経済学部に進学した。昼間は手島直幸の後がまとして東大出版会教材部の経済学部編集委員ということで法文31の地下の教材部で校正をし、午後には御殿下に行ってコーチのまねをした。

コーチといってもサッカー指導について正式に習得したわけでもなし、要は少しエラそうな顔をした球拾いを2年した。監督は理論・実技(往年のプレーをこの目で見てはいないが)ともに日本トップの浅見先生であるからその指示に従った。現役の延長だから体力だけはそこそこあって、筋トレやインターバルも一緒にこなした。特にGKの吉沢伸明や磨井祥夫は一番の被害者であつたろう。リーグ戦をどう戦うかの見取り図も持たず、ひたすらグラウンドに通った。本当は理論・戦術をキチンと勉強しなければいけなかった。

49年に卒業した。小山富士夫先輩のおかげで富士通に入社することができた。人使いは荒いが、あまり堅苦しいところもない会社で助かった。卒業後も引き続き週末にはグラウンドに行った。監督が浅見先生から武田厚さんに交代したのが51年で、そのときには若手OBが週ごとに交代でグラウンドに出ることにしたが、人数はなかなかそろわなかった。

3. 監督時代(昭和53年度)

昭和52年の10月に結婚した。その年のリーグ戦で現役が2部から陥落した。記録を見ると立正大に1-2で敗戦とあるが、ゲーム内容の記憶は定

かでない。場所は駒沢だったと記憶する。唯一手元に残っているメモによると、応援にいった何人かのOBで渋谷のレストラン(?)で沈痛な会話をしている。

▽メモより 佐々木順孝「勝つための目的合理性、基本技術の欠如」、小川恭二さん「根性無い。悔しい。何で力を出し切らないのか」、浅見先生「現役の決意の程を確認する要あり」。

このあと監督をされていた武田厚さんが仕事の都合で続けられなくなり、何回かOBが集まって協議、成り行きで私がやることになった。

▽メモより 12月3日 山上会議所で納会。終了後に上野「山下」へ。4年は宮、吉野、吉江、岸戸、上村、3年は平林、飯島、宮崎、OBは須賀、小山、中村、武田、八林、古村。

小山先輩「来年度の取り組み姿勢を明確に。監督は古村」

宮(新主将)「2部復帰を目指す。この8人の合議で運営する」

須賀先輩「来年すぐ復帰をと性急に考えず、この際徹底的に問題を洗い出していくべき」

古村「OBとの交流は受け身であってはならない」

当時サラリーマン4年目で、会社としては一番使い手があった時らしく、やたら残業や休日出勤をしており、土日だけグラウンドに出るという中途半端なものであった。当時のメモには「監督は全選手のコンディションを把握できる状況になればならない。土日だけで監督をするのは間違いである」との上妻達也の言を記していて、監督を引き受けることをためらったことを思い出す。当時はそのくらい人を得なかったし、現在のように専属コーチを招請できるような人材も見当たらないし、受け入れ態勢もなかった。

そんな状況の中で監督を引き受け、平日は残業で深夜帰宅、土日は練習・試合、そしてそのあと出社というほとんど家にいない状態を続けた。「今の時代だったら即離婚ね」とことあるごとに妻に言われた。

4年生は宮恭久が主将、上村司が主務で総勢でも5人と少なかったが、3年生は10人以上いて、技術的にもメンタル面でも個性のある選手が多かった。こういった選手を技術的・理論的に指導することはかならず、個々の選手の潜在能力をチーム力として顕在化することは出来なかった。当時

監督としてどのような言動をしたのか定かでないが、吉野元章によると以下の言葉が記憶に残っているそうである。

＜古村さんの言葉で印象に残っているのは、審判に判定への不満を口にした我々に対し、「ちゃんとした審判でやりたかったら上に行け」とか、「4年はリーグ戦のメンバーから外せというOBの声もあったが、結局点をとっているのは4年なんだよな」とかといったものです＞

監督というよりもOBサポーター的発言であり、技術的・戦術的なスキルをキチンと教えることができていなかったことが推察できる。このあと何年かして専任の監督、コーチを招請することとなる。スポーツのプロ化が進展するなか、学生スポーツをどのように位置づけて運営するのか常に議論のあるところである。

リーグ戦が終了したところで、以前より体調(眼疾患)に問題があり、これ以上負荷をかけるのはだめとの医者のご託宜で辞任を申し出た。善後策で何回かOBが会合を持った。当時新日鉄から経企庁に出向して、「経済白書」執筆に携わっていた内田純司に引き継いでもらった。

私がコーチをしていたときか、監督だったときか忘れたが、合宿時で雑談をしていたときと記憶するが、浅見先生を交えて何人かで以下の話になった。

＜技術は突出しているがチーム連携では少々難ありという選手と、技術・戦術面では少々難あるもチームからの信頼が厚い選手がいたら、どちらを起用するか＞

そのときの浅見先生は明快に前者だった。私はいまだにどちらとも定まらない。それ以前の問題として指導できるだけのバックグラウンドを身につけていない私の指示を受けざるを得なかった当時の現役諸君の不運に同情する。

抜きん出た部作り目ざし

新しい発見や感動の連続

監督(2007～) 藪内俊和

2006年1月に東大L B会が法人化されて発足した「現役支援委員会」の委員長として、現役にか

かわり始め、その後、思いがけず福田前監督のあと監督として直接現役と接する立場となり、今年度は2年目となります。小文は「述懐」としたいところですが、現職なので「抱負」と題しているものの、私の卒業後のサッカー経験やサッカー観を記したいと思います。

不完全燃焼では終われない

1969年、東大闘争の最中で学内が騒然としたなか、大幅に遅れたものの6月末にともかくも卒業し、就職活動のOB訪問で再会させていただいた3年先輩の野村晋作さん（昭41卒）のお薦めもあり、今振り返れば、東農大に大敗したため関東1部との入れ替え戦に出場できずに終わり、不完全燃焼のままではサッカーを終われないという意識があったのでしょう、「卒業後もサッカーのできる環境」が最大の魅力で東京海上に入社しました。

入社してみると東京海上は、関東大学リーグからは東大以外にも慶応大、一橋大、上智大、学習院大などの出身の優れた選手がおり、東京都社会人リーグ1部で毎年、優勝争いをする強豪チームでした。会社の積極的な支援はありませんでしたし、チームの方針、モットーも大胆かつ簡潔に表現すれば「サッカー選手である前に東京海上マンとしてトップクラスの社会人になること」でしたので、週末以外にはボールを蹴ることはなく、大学時代とはまったく異なる100%サラリーマン生活となりました。

しかし週末の練習や試合以外にも、藤本鉄也さん（昭30卒）、浜口幸久さん（昭33卒）らの大先輩や前出の野村さん、関東2部で好敵手だった上智大OBで3年先輩の市村俊一さんらに、退社後毎夜のように深夜に至るまで社会人教育を受けました。私自身は28歳で海外研修生に選ばれ、ニューヨークに留学するまで現役選手としてプレーし、その間1974年には幸運にも東京都社会人の代表選手に選抜され、主将として予選を戦い抜き、茨城県で開催された国体一般成年の部に会社から特別休暇をもらって出場し、優勝を果たすことができました。この国体東京都代表チームには宮本征勝さん（故人）をはじめとする当時の日本リーグの古河電工や日立製作所で出場機会の少なくなっていた往年のベテラン名選手もおり、プレーヤーとしてピークにあった私には、これ以上ない忘

れられない経験ができました。

シニアチーム設立に参画

その後、ニューヨークからの帰国後はOBの一人として、東京海上の監督や部長を務めました。むしろ地元、横浜市北部のあざみ野でシニアのサッカーチームの立ち上げに参画し、週末シニアプレーヤーとしての活動がメインとなっていました。東大にはグラウンドに足を運ぶことも、現役との接触も東京海上への入社の勧誘活動以外にはほとんどありませんでした。

そんな私も、東大LB会の法人化の準備活動に参画するようになってから東大の現役の状況を知り、自分の中のア式蹴球部のイメージとの乖離に問題意識を持ち始めました。自分の東京海上でのサッカー人生の基礎となった「東大ア式蹴球部4年生時代」の道をひらいて頂いた1年先輩の小川恭二前主将や、その道を導いて頂いた浅見俊雄監督（昭31卒）ら先輩諸兄への恩返しとして「自分ができることはしなくては」と思うようになり、いつしか仕事よりもLB会活動に全力投球をしている自分に驚くことになりました。

ア式蹴球部の監督としては故服部元監督以来の「ロートル」監督ですので、我が子より若い現役選手と接するにあたり、現役から「昔話しかしない、小うるさい先輩OB」とみられ、OBとの距離をますます感じないように、「自分を理解してもらうよりも、自分が現役を理解すること」を第一義として接することになりました。そのため週日も原則として毎日グラウンドに行って、練習を見ないようにしました。

中途半端な立場に悩みも

大学サッカーの指導者は、一応大人になった個人としての学生と接するという意味では、未成年の高校生以下の指導者とは大いに異なり、人間性形成や錬磨よりも技術や戦術・戦略面の指導がメインとなります。しかし一方では社会人チームの指導者とも異なり、完全な成人として突き放すだけでは十分でない面もあります。その意味ではプロのコーチに毎日の練習や試合を見てもらう今のア式蹴球部の体制下では、監督はやや中途半端な立場・存在なので現役との関係の持ち方が難しく、焦燥感に悩んだり落ち込むこともありますし、毎日新しい発見・驚き、失望・感動の繰り返し

しの連続です。

しかし、大学サッカーのOB監督の最大の任務は「現役がOBの存在やLB会の伝統や活動を理解して、心強い味方がいることを自覚し、サッカーに打ち込める環境をつくることにある」と考え、割り切って進んでいこうと思っています。その意味ではこの2年間の1年目の2007年度は、戦力的にはここ数年で最も充実しているとの前評判でしたが、もう一步で東都1部昇格を逃し、戦績としては満足する結果となりませんでした。また、部としてのまとまりや運営面でも今一つでしたし、さらにここ数年、春の新入生の勧誘も不首尾に終わり、部員数が減少していることも問題でした。

2年目は、「東都で戦績だけでなく、チーム運営でも他校に負けず、むしろ抜きん出たチームを目指そう」と現役に監督としての自分の目標を提示しました。ここ数年、懸案と思っていた「C級指導者ライセンス」の研修会に会社を5日間休んでチャレンジしましたし、現役も新入生勧誘活動を全員参加で積極的に行うなど、新しい取り組みをしています。なんとか数年間のうちに「東都で抜きん出た一流の大学サッカー部になること」を実現したいと思っています。

計り知れない部の功績

日本サッカー界の原動力

臨時コーチ（1974年） 松本光弘

いま私は、浦和中学・浦和高校のサッカー部史「麗和」の中の「史上初の三冠王獲得一年間通算52連勝を達成すー」（浅見俊雄記）を読んで、記憶が事実であったかどうかを確認するために、勤務先の図書館に行ってきた。昭和27年1月7日付新聞のラジオ番組に、全国高校サッカー決勝戦の実況が本当にあったことを裏付ける活字を見るためであった。確かに、NHK第2放送の午後1時15分から4時30分まで、決勝戦の実況があったことが番組一覧に載っていた。このラジオの実況が、私をサッカーに導いた火種であったと、私は秘かに思い返している。

兄と同じく浦和高校に進学

私の長兄が埼玉県立浦和高校に安行中学校から初の合格者として進学し、1年生で在学していたのがこの年であった。正月早々、兄は一生懸命聞きにくいラジオの実況放送を聴いていた。6歳下の私は小学校4年生の時に当たる。サッカーなどというものはまったく知らず、ただ兄が応援している浦和高校が勝つことを願っていたこと、また、もし浦和高校に進学できたら強いサッカー部に入るのもいいかなあ、などとおぼろげに憧れを抱いた記憶が残っている。

それから兄は、浦和高校サッカー部の監督の指導は大変厳しいことなどを、弟たちに話してくれた。そして、その優勝チームのメンバーの中の一人が東京大学に現役で合格したこと、その人は大変努力家で、勉強方法が変わっていて、合理的であったことも話してくれた。サッカーの練習で疲労困憊して帰ったその人は、食事とともに水をたくさん飲み、まず寝る。そしてたくさん飲んだ水で小用のため早朝目覚め、それから勉強をして、見事東大に現役で合格したとのことであった。私が浦和高校に進学し、本格的なサッカーにはじめて出会い、それ以来あらゆる機会に、直接あるいは間接的に大きな影響を受けた人でもある話題の人が浅見俊雄先生であった。

私は幸運にも浦和高校に進学でき、そこで出会った先生が、その後に池森君の広大附属の監督となった福原黎三先生であった。その先生から絶大な感化を受け、先生にはなるまいと思っていた教員の道を進むことになった。前述の浅見俊雄先生は、東大在学中も卒業後もたびたび母校の浦和高校に来て、私たちをコーチして下さった。

コーチ研修うけに海外へ

私は東京教育大学に進学し、選手、指導者の道を進むこととなった。卒業後、母校の東京教育大学の監督を2年目から任され、3年間行った。その後、事情があり、福島大学に赴任して10年間勤めた。その間、昭和46年2月から8月までの6ヵ月間、西ドイツ、イングランドを中心に、海外研修を許された。また、2年後の昭和48年10月から12月末の3ヵ月間、テヘランで行われたFIFA主催アジア・コーチングスクールに日本サッカー協会から派遣された。その翌年、昭和49年から日本サッカー協会のコーチングスクールを担当することになった。このコーチングスクールの原点

は、昭和44年に東大検見川運動場で開催された第1回FIFA主催アジア・コーチングスクールである。

東大よ強くなれの思いで

私も平成5年のJリーグのスタートまで日本の指導者養成にいろいろな形で関わってきた。そんな中、テヘランから帰って気力・体力とも充実していた33歳の春、尊敬してやまない浅見先生から光栄にも東大のサッカー部の合宿を見てくれないかとの依頼を受けた。毎年1ヵ月以上、サッカー協会の仕事で滞在する検見川運動場、芝生での指導はそのころは願ってもない条件であった。何のためらいもなく承諾し、そして合宿。今思えば、選手の人数、技能レベル、その他いろいろと確認してから行るのが当然であるところを、いきなりこちらのレベルに合わせて行われた1週間の合宿は瞬く間に終わってしまった。とにかく、うまくなってほしい、強くなってほしいとの一途な思いから、各自の名前もろくに覚えず、ヨーロッパで見たサッカーの強烈な印象を下敷きに、日本の最高学府のエリートたちがそれに少しでも近づいてほしい、感じ取ってほしい、またそれが日本のサッカーの発展につながるものと邁進した記憶が残っている。

広大附属出身で主将の池森君、湘南高校出身の田中君は特に技術・体力とも優れていた。思い出話に出るバービーからの連続ジャンプヘッドはプレッシャートレーニングといって、局所持久力を開発するのに適した方法である。しかし、これを40秒以上行うことは無意味で、日本で言うシゴキになってしまう。当時の合宿で、田中君に何回試技をさせたか、確たる事実は覚えていないが、田中君の優れた身体能力を見込こんでのデモンストレーションの指名であったことははっきり覚えている。

この年度の終わりに、人づてに春の合宿を指導してもらって良かったと聞いた記憶を思い出しながら、今記録を確かめてみると「2部から落ちなくて良かった」ということだったのかな、と自分の指導の未熟さを反省している。

更なる活躍を心から望む

最後に、私が日本のサッカーに関わり、今日まで来てつくづく思うことは、東京大学ア式蹴球部

の日本サッカー発展に果たした功績は、計り知れないものがあるということである。私の母校、東京教育大学・筑波大学も大きな貢献はしたものの、日本のサッカーが世界で通用するようになった原動力は東京大学のア式蹴球部であり、近年では岡野俊一郎、浅見俊雄両氏など直接サッカーに関わった方は言うに及ばず、政界、官界、経済界など日本の国内、国外を含め、多くの東大出身者の活躍抜きには到底不可能であったことは、この東京大学ア式蹴球部の90年を振り返れば歴然としている。

また、もっと大きなことは、この発展を維持継続し、今後とも未来に向けて更なる発展をすることである。それにはこれまで以上に東京大学ア式蹴球部の日本国内国外での存在は重要なものと考ええる。現在、そしてこれから東京大学ア式蹴球部に足を踏み入れるであろう人の更なる活躍とご多幸を祈ってやまない。

もし、今一度、東大検見川運動場で東大のサッカー部を指導してほしいと頼まれたら、何はさて置いても馳せ参じたい。きっと前回より楽しく、効果的に合宿の成果を上げることができるのではないかなどと冗談半分に空想を巡らせている。

(筑波大学名誉教授、平成国際大学教授)
(日本サッカー協会参与)

服部さん いまどこに 居るんですか

「横断幕」作って偲んでいます

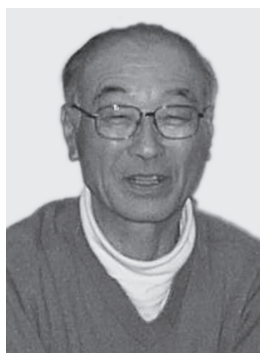
亡き監督を悼んで



拝啓 服部さんは今どこからア式蹴球部のサッカーをご覧になっているのでしょうか。服部さんが亡くなられてから2年5ヵ月が過ぎましたが、今も、ア式蹴球部の選手たちはあのころと同じように、鈴木コーチのもと東京都リーグ1部への昇格を目指して頑張っています。

僕が初めて服部さんと出会ったのは、入部前に同期の坂本優と練習を見学しに行ったときです。服部さんは覚えてないと思いますが、何か質問されて答えたら「そうかね」と言われた記憶があります。短い会話でしたが笑顔の素敵な優しいおじいちゃんという印象でした。

入部後は、時に厳しい言葉を投げかけてチームを叱咤激励する姿を見て、監督の威厳を感じていましたが、挨拶するたびに「元気でやってるかね」といった言葉をかけて気づかってくれたのは、新入部員の僕にとってとても嬉しいことでした。主将たちとどういった話をしていたのかは分かりませんが、夏の暑い日も冬の寒い日も雨の日も、服部監督が農学部グラウンド（当時の練習場）に足繁く通



（上）部関係の有志で作った横断幕。服部監督が好んで口にした言葉が書いてある。後列中央の女性には服部圭以（たまい）さん
（左）故服部一郎監督

って、練習を見たり声をかけたりしてくれていたことはよく覚えています。こういったことも皆から慕われていた所以なのでしょうね。

僕個人としては、特に3年まではけががばかりして、服部さんの期待に応えることができなくて本当にすみませんでした。引退後の加賀屋での飲み会の席で、「しかし、牧には本当にながかりさせられたな」としみじみ言われたときは、言葉もありませんでした。「でもまあ、4年間よく頑張ったよ」と言葉を続けてくださったおかげで救われましたが…。主将として戦った最後の1年も、けがの心配をしてくれたりチームにカットを入れてくれたりして、いろんな面で助けていただきまし



練習試合の前、グラウンドに立つ故服部監督
(2006年7月29日、同志社大で)

た。また、引退後には自宅に4年生全員を招いてくださって、とてもおいしい奥さんの手料理をご馳走してくださいました。

本当に、何から何まで、どうもありがとうございました。僕がOBコーチになった後も、シーズンインの前や大会の前など、折を見ては幹部陣の激励会を開いてくれましたね。ア式蹴球部は服部さんに支えられていたんだなあ、とつくづく思います。

これは服部さんが亡くなった後に、奥様の圭(たま)さんから聞いた話なのですが、2005年の秋から冬にかけては、もうかなり病が進行していて、立っているのも辛い状態だったそうですね。それでも「寝ていて痛いのであれば、グラウンドに行って痛みに耐えた方がましだ」と言ってグラウンドに来てくださっていたと聞きました。僕はOBコーチを含め5年間、そんな服部さんの下でサッカーをすることができて本当に幸せでした。

ところで、服部さんの想いを後輩に引き継ぐため、奥様の発案で、小野高志さんを中心にして、服部世代有志一同の寄付により横断幕を製作しました。服部さんがよく使っていた「足を止めるな! あきらめるな! サッカーを楽しめ!」という3つのフレーズを入れたのですが、いかがでしょうか。(かの有名な「ビールは水だ!」のセリフは皆の心の中に…)。今も公式戦では横断幕が張られ、選手を鼓舞しています。

また奥さんは、服部さんは千の風になって、ひょこっと現れては練習や試合を見ているはずだとおっしゃっていました。僕も試合を見ていると、

服部さんがそばにいるような気がします。2006年6月18日の春季リーグ決勝トーナメント初戦(対玉川大学)のPK戦でも、同年10月29日の秋季リーグ最終節(対首都大学東京)でのPKでも、服部さんにお祈りしたらPKが止まった(外れた)ことで確信しました。ただ、さすがに願いをかなえてくれるのは1試合に1回だけなんですね。

これからもア式蹴球部の選手たちを温かく見守ってください!

敬具

平成20年10月13日

牧 尚史

【服部一郎略歴】

- 1936年(昭11) 2月5日誕生
- 1955年(昭30) 開成中学、開成高校を経て東京大学文科一類入学
- 1960年(昭35) 東京大学法学部卒業
- 1960年(昭35) 新三菱重工(現三菱重工)入社
開成中学校からサッカーを始め、中学、高校、大学、三菱でレギュラーとして活躍し、1958年には東大LBで天皇杯3位、1960年には東大の関東大学2部優勝に貢献
- 1996年(平8) 胃がんの手術で3カ月入院
- 1997年(平9) 三菱重工特別顧問に就任
- 1998年(平10) 東京大学ア式蹴球部監督に就任
- 2004年(平16) 前立腺がんで手術
- 2005年(平17) がんの転移見つかるも病をおして監督続行、リーグ終了後監督勇退
- 2006年(平18) 5月9日逝去 70歳

ベルリン・オリンピック

竹内悌三

日本代表チーム主将 （昭和7年卒）

妻の質問が描いたある情景

中原壮六

「あなた、竹内ていぞうさんってご存知？」と妻から不意に尋ねられたのは、結婚して何年も経ってからではなかったかと思います。「知ってるよ」と返事をしたものの、どうしてそんな質問が出るのか、その時は良くわかりませんでした。

私たちは昭和34年郷土の大分県先輩のお世話で全くの見合い結婚をしました。お互いに相手のことも良く知らないままだったようでした。そのころ北海道の石炭会社に勤めていた私は、雪の無い夏の間だけ近くの高校にサッカーの押しかけコーチをしたり、会社の若手を集めてサッカー部をつくり、あまり盛んでなかったその地方のサッカー大会に参加したりしていました。

結婚してすぐに子供が続けて2人も出来、妻は家事に育児に追われ、家を顧みない夫を支え、慣れない雪国の生活を夢中で生きていたころでした。子供を育てるうちに、自然と生まれる子供に対する愛情の感覚からか、幼いころの或る情景を思い出したようでした。

それは昭和16～17年ころ、日本が太平洋戦争に突入するころ、仲良しの従姉妹の家に遊びに行っていた時のことで、2階から下をじっと見ているその家の父親がいました。見ている視線の先は自分の娘（私の妻の従姉妹）で、当時3～4歳が、無心に遊んでいる姿と思われました。妻はその時、どうしてあんなにジーっと自分の娘を見ているのだろうと、不思議に思うほどであったと言います。その後、日を経ずしてその父親は出征して行きました。戦後その父親はシベリアに抑留され、帰らぬ人となりました。

今にして思えば、あの時、その家の父親は出征を間近にして、もう見る事が出来なくなるかも知れないわが娘の姿を、目に焼き付けていたので

はないか……。あの2階から下をジーっと見下ろしていた不自然とも思われるくらい長い時間のあの様子を、妻は今でもしっかりと覚えているそうです。そして、そのことを私にその後もよく語るのです。鬼気迫るとでもいえそうなその情景は、幼いころとはいえ6～7歳の妻の心に、今もなお強烈な印象として残っているのでしょう。自分にも子供が出来、子供に対する愛情が生まれてきて、初めて、あの情景が理解できる様な気がする、それを思うと、あの時の父親の心情はどんなであったか…とこの昔話を語るとき、妻はいつも目が潤むのです。

この父親が、何と竹内悌三先輩なのです。

私は、竹内悌三さんを直接には知りません。ただ1936年のベルリン・オリンピックに日本サッカー代表が初めて参加し、無名で非力であったのに、初戦で当時優勝候補であったスウェーデンに奇跡の逆転勝ちをして、世界のサッカー界を驚かせた名誉ある選手の1人であることは、我々の間ではあまりにも有名で、憧れでもあり、誇りでもあったのです。

その、ジーっと見られていた娘さんが竹内幹子（もとこ）さんで、今や照明デザイナーとして日本の第一人者となっています。Jリーグのスタジアムの照明もいくつか手がけておられると聞いています。

私は、立派な先輩を身近に持つことになって光栄ですが、諸先輩が文字通り礎となられ、今日の日本のサッカー興隆の基を築かれたことに思いをいたし、感謝申し上げるばかりです。その万分の一の恩返しのため、東大L B会にささやかですが寄付を続けようと思っています。

名選手は娘に優しい父だった

父の視線に見守られて

照明デザイナー

石井幹子

私の父、竹内悌三は1908年生まれで、五中（旧制）、浦和高校、東大とサッカー一筋に打ち込んでいたようである。社会人となってもサッカーに熱中し、ベルリン・オリンピックでは日本代表として出場した。今でも、母から譲られた私の写真アルバムには、オリンピック村に入場した時に旗手となって、大きな日章旗をかかげて選手団の先頭に立つ、父の写真が残されている。

銀行家の跡取り息子で東大出の父には、うず高くお見合い写真が積まれていたそうだが、たまたま届けられた母の写真を見て一目で気に入ったという。若く聡明で明るい性格の母は、理想の人だったようだ。

父は当時としては少し遅い29歳で、母は20歳のときの結婚で、翌年生まれた私は、父の秘蔵っ子であった。昭和10年代の日本の男性としては珍しく、会社の机上に母と私の写真を飾っており、社内では「竹内さんご自慢の奥さんと娘さん」と評判であったという。

その後、第2人が生まれた。戦争が激しくなった昭和18年に召集されて満州の各地を転々としたが、終戦後はシベリアに抑留され、翌年の4月に捕虜収容所で病死した。それを知らされたのは2年後のことであった。

恵まれた境遇に生まれ、サッカーを愛し、オリンピック出場という栄誉も得て、将来を約束されて社会人となり、理想的な女性と結婚し、3人の子供にも恵まれるという幸せで華やかだった父としては、何とも心残りの無念の死であったことかと思う。

幸い母方の祖父が健在だったので、私たちはその庇護の下で成人したのだが、母は父が期待した通り、聡明で元気よく、家は明るい雰囲気に包まれていた。



後ろに立つのが父の悌三氏、左端が幹子さん、右は母と弟さん

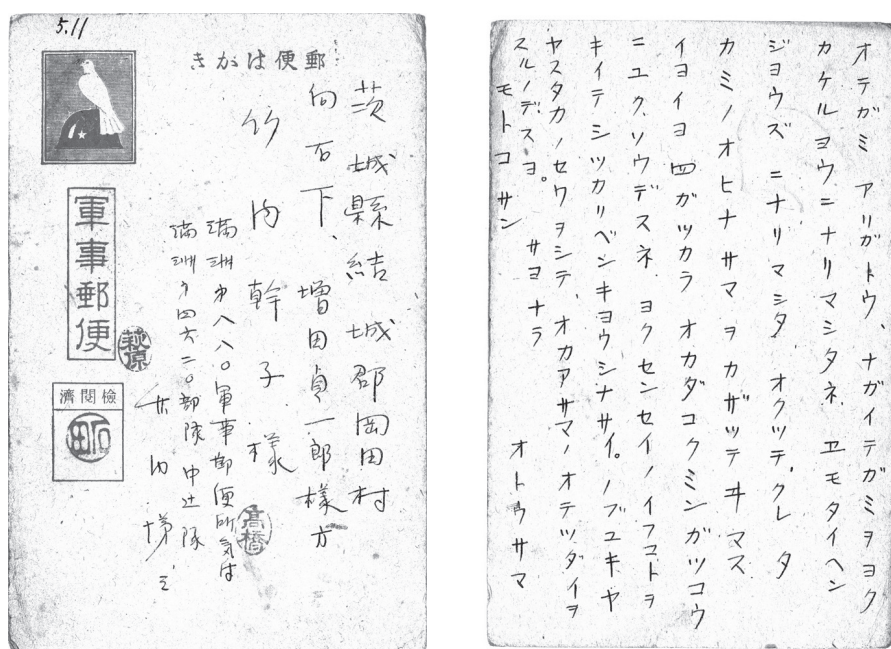
多くの方からご縁いただき

私が父・竹内悌三に守られていると感じるようになったのは、東京芸大を卒業して社会人となってからである。ある日、夫（石井紫郎・東大名誉教授、赤門運動会会長）が帰宅して、意外な話をしてくれた。「赤門近くのバーで飲んでいたら、都市工学の高山英華先生が近くにおられて話をするうちに『君はモクさん（父のあだ名）の婿か！』とびっくりされたよ」

当時、建築や都市の照明デザインという日本では新しい分野を開拓中であった私にとって、高山英華先生といえば、都市工学の大先生で、仰ぎ見るような存在の方である。聞けば父と同じころ、東大でサッカーをされておられたという。以来高山先生は何かにつけて私のことを気にかけて下さるようになった。「困ったことがあったら、いつでも言いなさい。朝8時ごろ、自宅に電話するように」と電話番号まで教えて下さったのは、本当に心強く有難かった。

もう一人、父のサッカーの縁で私を支えてくださったのは、三井造船会長で、経団連の副会長から初代J R東日本の会長になられた山下勇さんで

痛恨！シベリア抑留中に死亡



満洲から幹子さんに送られた葉書

ある。ある日、本田財団のサロン・トークで私がスピーチしたあとのことであった。

突然手をあげて話しはじめたのが山下さんで、熱弁をふるって父・竹内悌三と一緒に東大でサッカーをやっていたこと、本日のスピーカーは父親似であることといった、要は私への応援演説であった。以来山下さんは、「モトコちゃん」と私を呼び、正に娘のように可愛がって下さって、フリーランスの照明デザイナーとして孤軍奮闘していた私を、なにかと励ましてくださった。

加えてもう一人、父の関係でご縁をいただいたのは、国際オリンピック委員として名高い岡野俊一郎さんである。岡野さんは父と同じ旧制五中(小石川高校)、東大でサッカー一筋の方である。照明についても関心をお持ちで、サッカースタジアムやスポーツ施設の照明デザインを行うときに、貴重なアドバイスをいただいた。

最後に浅見俊雄先生についても述べさせていだきたい。浅見先生は夫とのおつき合いから、私が竹内悌三の娘であることを知って、貴重な資料

をわざわざ探し出してお贈り下さった。それは日本蹴球協会の昭和10年代はじめのころの機関誌で、ベルリン・オリンピックのあと選手団と別れて、1人ヨーロッパ各地のサッカーを観戦してまわった父のレポートを掲載した記事であった。今のように世界の強豪チームのサッカーなど見る機会が全くなかった時代に、1試合見るたびに即勉強になったことであろう。

高山英華先生、山下勇さん、岡野俊一郎さん、浅見俊雄先生と接して、私はその向こうで父が見守ってくれているような気がしたものである。私が若い頃は、まだ女子サッカーがなかったので、残念ながら私にはサッカーをやった経験がない。でも、サッカーの試合を見るのは大好きである。

父は生前、将来日本でサッカーは必ず盛んになると言っていたと、母から聞いたことがある。現在の隆盛をきっとどんなにか喜んでいることであろう。日本のサッカーが、オリンピックやワールドカップで好成績を上げることが出来るよう一サッカーファンとして、私は切に願っている。

財政基盤の強化が口火に

東大LB会 法人化のいきさつ

現役の支援が最重要課題

いわゆる「LB会」（東京大学ア式蹴球部のOB会）は、長らく部の栄光の歴史と伝統をバインダーとして厳然として存在はするものの、多くの会員にとっては年に数回、現役の状況報告と会費納入のお願いおよび会費納入済みの会員のリストが送られて来るだけで、いかなる活動をしているのか、実態の見えない存在であった。

97年、会則を決めLB会発足

その状況を憂えた二宮泰（昭24卒）や原靖二郎（昭32卒）らが役員会を設けてOB会として組織的な活動をしていこうとして動き、1997年5月に会則を初めて制定した。会の名称を「東大LB会」とし、会長、副会長2名、幹事9名および会計幹事1名の体制を作り、ア式蹴球部の発展と会員のサッカー活動の推進および会員の親睦を図ることを目的として活動することになった。

新体制の具体的な活動として、まず1998年（平成10年）に、現役指導体制の強化が図られ、服部一郎（昭35卒）が監督に就任し、その下でプロのコーチと専任契約を結ぶ体制がとられることとなった。さらに、年間5、6回の「LBニュース」の発行（全会員へ郵送）、現役の納会開催などに合わせての総会の開催が行われるようになった。

また、1999年7月には50回記念を迎えた京都大学蹴球部との定期戦を機に、上記の東大LB会の目的に掲げた“会員のサッカー活動の推進”の具体化として、50歳を超えたOBが声を掛け合って集い、ともにボールを蹴ろう（試合をしよう）という「LB50」がスタートした。これは、この10年前から行われていた早稲田大学、慶應義塾大学と東京大学3大学による超OBの定期戦で、年月の経過とともにメンバーが減ってきたので、50歳代の供給を求めた、当時のとりまとめ役の折原一雄（昭31卒）の要望に応じて、樋口周嘉（昭40

卒）らが呼びかけを行ったものであった。

その後、60歳以上を対象に「LB60」も動き出し、それぞれ年に15回から18回程度の試合の機会を持つようになった。

このようにして、ようやくOB会としての体を成してきた「東大LB会」ではあったが、依然として会費の納入は現役が管理する口座に直接払い込む形をとっており、支出の責任は現役任せで、OB会として集めた会費で、具体的に目に見える形で現役を支援するための予算執行をしていくということにはなっていなかった。

会費納入率と基金問題を指摘

そんな中で、2004年12月に開かれたLB会の役員会で、会費納入率が上がらないこと、特に1976年以降の卒業生では未納者の方が多いことが指摘され、何らかの対策の必要性が認識されたが、この時は具体的な動きにはつながらなかった。また、この役員会の席上で、古き良き時代に集めた部の基金が800万円あるが、これが個人名義の公社債投信と定期預金の形となっており、名義人に万一のことがあると扱いが難しくなるとの指摘があり、その取り扱いについての検討が必要なこととも認識された。

さらに、大学側から創立130周年を記念して行う130億円の基金募集への協力要請があったのを受けて2005年5月に開催した役員会で、大学からの要請に従って企業への寄付のお願いをするよりも、東大LB会としての財政基盤を固めることが先決であるとの意見が手島直幸（昭47卒）から出された。

法人化に向けて10人の検討委

その後、会費問題、基金問題を含めて東大LB会の財政基盤を固めるためにはどうすれば良いかを考え出した手島は、LB50とりまとめ役の樋

口、公認会計士の堀井茂（昭51卒）らと対応策についての話し合いを進め、「NPO法人化」が求める解ではないかと思いついた。

その思いを整理した手島は樋口らの同意の下で、2005年7月末の京大戦の応援に集まったOBに対し、「東大LB会NPO化に関するアンケート」を実施し、LB会が抱える問題点を訴えつつ、その解決策としてのNPO法人化についての感触を探り、かつ、賛意を示す人の中からNPO法人化検討委員会メンバーへのボランティアを募った。

40人ほどのLB会員からの回答はおおむねNPO法人化の方向に賛成するものであり、検討委員会メンバーへの立候補も予想を超えて集まった。

これを受けて、手島、樋口の2人は、「NPO法人化有志の会」を開催することとし、8月20日に交詢社で小山富士夫（昭35卒）、武田厚（昭45卒）、吉澤伸明（昭50卒）、兵頭圭介（同）、南谷尚志（昭51卒）との会合を持った。

この会合では、冒頭に手島からNPO法人化に思いついた経緯を記した文章（付属資料1）を披露し、議論を行って、樋口を委員長とする法人化検討委員会を設けて検討を進めることを決めた。委員は、先のアンケートの結果を尊重して、以下の10名とすることとした。坂井忠昭（昭42卒）、藪内俊和（昭44卒）、手島、吉澤、兵頭、南谷、影本浩（昭51卒、ア式蹴球部部長）、堀井、河島清貴（平16卒）、辻正太（平17卒）

この後、法人化に向けての検討が具体的に始まった。以下に、法人設立までの動きを箇条書としてまとめる。

法人化までの検討委の動き

▽2005年（平成17年）9月3日 第1回NPO法人化検討委員会を開催

東大ア式蹴球部のOB会である東大LB会は法人化をすることが必要であり、NPO法人とする方向で検討することとし、11月のホームカミングデーまでに案をまとめ、当日開催予定の東大LB会役員会に提案することを決定。

▽10月8日 第2回検討委員会を開催

▽10月29日 第3回検討委員会を開催

▽11月19日 東大LB会役員会でNPO法人化について説明

委員会での検討状況を説明し、東大LB会の

今後を考えて法人化に進むことは好ましいことだとの認識を得て、以後、定款の詰めを行うなどの準備を進めるとともに、「LB会報」で会員に法人化の考え方を示し、12月18日の総会で法人化についての賛同を得る方向で動くこととなった。

▽12月1日付のLBニュースで総会での審議を予告

LBニュースに、12月18日開催の総会でLB会のNPO法人化について賛同を得たいとして、その提案の趣旨を掲載し、周知を図った。

▽12月3日 第4回検討委員会を開催

役員会幹部の出席も得て、定款の最終案をまとめた。

▽12月12日 内閣府国民生活局市民活動促進課の見解聴取

ようやく定款（案）がまとまったので、NPO法人認可が得られるかどうかの見解を求めたものであるが、ここで、定款（案）では主たる事業として、東大ア式蹴球部の支援と会員自らの生涯サッカーの実現を挙げていることから公益性が認められないので、NPO法人の認可は得られないであろうとの指摘を受けた。

しかしながら会員の共益をもっぱらとする団体として“有限責任中間法人”としての法人格取得は、定款を改めることなく可能であるとの示唆も得た。

▽12月14日 学生課に対し法人化構想を説明

東大の学生課に対し、樋口、手島、吉澤の3名で、ア式蹴球部のOB会を法人化したい旨を申し出て、その背景や定款の内容について説明した。ここでは前々日の指摘を踏まえて、資料ではNPO法人としているが、多分中間法人になるとの説明を行った。

▽同日 中間法人で進むことに方針を変更

学生課への説明後、樋口、手島、吉澤の3名で協議をして、定款（案）の内容はそのままとして中間法人とすることを決心した。

▽12月16日 方針変更の通知

LB会役員および法人化検討委員会メンバーに、翌々日のLB会総会では、開催案内で「NPO化についてうんぬん」としているが、中間法人化として説明をし、賛同を得たい旨を通知した。

▽12月18日 LB会総会 山上会館会議室

法人化検討委員会から、法人化についての提案を行い（提案の主旨を付属資料2に示す）、審議を経て、LB会を「有限責任中間法人東大LB会」の名の下に法人化することについて出席者の賛同を得た。1月7日にLB会役員会を開催し正式決定を行うこととなった。

▽2006年1月7日 LB会役員会で法人化に向けての最終確認

法人化のメリット、デメリットの最終確認を行い、定款の最終案を審議し、法人化に最終ゴーサインを出した。

▽同日、引き続いて設立時の役員候補者による有限責任中間法人東大LB会設立総会を開催

設立趣意書、定款、規則、役員名簿を承認し、今後の手順を確認して、法人設立登記に進むことを決定した。

▽2006年1月23日の登記完了を以て法人成立

▽2006年2月15日発送の「LBニュース2006年2月1日号」で、会員に法人化が完了したことを報告（この記事の内容を付属資料3に示す）

▽2006年3月25日 有限責任中間法人東大LB会の第1回社員総会を山上会館で開催

総会に先立ち、有志による記念紅白試合を御殿下グラウンドで行い、総会後には第二食堂に場所を移して設立祝賀会を開催した。総会出席者は70名であった。

組織のあり方を見直すべきとき

<付属資料1>

2005年8月20日に述べた手島の挨拶（要旨）

昭和47年卒手島直幸です。発起人の1人としてこれまでの経緯をご説明しておきます。

2004年12月部室2階で開かれたLB会幹事会で、前年度決算の説明があり、会費納入率が低下しつつあり、昭和51年度卒以降は「納入者数<未納入者数」の傾向がはっきりしていることが報告されました。そして古くから引き継がれてきた基本会計800万円余の口座管理を法人名にして欲しいとの声もありました。私は、LB会の組織のあり方を見直すべき時だと感じました。

東大ア式蹴球部の先輩たちが老いてなお情熱を持って語る「東大のサッカー」というのは後世につなげる価値のあるものだと思います。われわれの世代までは当然ともいえるこの考え方は、若い世代には伝えられているのでしょうか。サッカー

がこれだけ普及して、東大がサッカー界のリーダーであった時代はずいぶん前のことになってしまいました。最近の若手のLB会への見方が伝統的な会員のそれとずいぶんちがってきていると思います。

5月5日、本郷で幹事会がありました。東大基金130億円寄付募集についての話でした。企業の東大への寄付を斡旋した運動部（OB会）には寄付金額の1割相当の見返りがあるというものでした。私は、居並ぶ大先輩を前にLB会の財政基盤を固めるのが先決であると発言しました。このとき100周年記念行事のことを思い出しました。御殿下グラウンドから農学部グラウンドにホーム移転のとき、LB会が集めた1000万円などで部室を作ったことを思えば、LB会が組織として大学と交渉しなくては何事も改善しないのではないかと。御殿下グラウンドに戻ってきて更衣室もシャワーもない現況は問題だと思います。国立大学法人として新しくなった東大の政策のもとで、運動部はそれなりの組織的対応を迫られているのです。

LB50の試合に参加しているうちに、LB会をベースにして、夢として描いている、サッカーのある暮らしの実現に近づけるのではないかと思います。

LB会とは何か、その課題は何か、どのようにして活性化すればいいのか、大学のサッカー部とは何か等々について、わたしはここ数ヵ月LB会メンバーやサッカー愛好者と話し合いを重ねてきました。包括的に課題を解決するために、NPO法人化という旗印で運動を起こすのが一番良いのではないかなと思うようになりました。思い立ったらすぐ動く「Just do it!」をモットーにしていますので、皆様に集まっていただき、LB会改革のスタートとしたいと思います。本日は、熱い議論を期待しております。

発展の一方、問題点もはらむ

<付属資料2>

2005年（平成17年）12月18日のLB会総会への法人化検討委員会からの提案

東京大学ア式蹴球部（以下、東大ア式蹴球部）は、大正年間に創立され、日本サッカーの草創期に大きな役割を果たしてきた。そのOB組織である東大LB会は、昭和10年代、20年代には全日本蹴球選手権大会で優勝も果たし、昭和30年代から

40年代にかけては御殿下サッカークラブとして社会人リーグで活躍した。また昭和40年代には御殿下少年サッカー教室を主宰して東京大学周辺地域の住民との交流を始め、現在も継続している。

任意団体東大LB会は会員総数700名以上（物故者を含む）を数え、その活動は東大ア式蹴球部の育成・強化・指導を中心に、OBチームの運営、少年サッカー教室の運営などに及んでいる。

近年、東大ア式蹴球部ならびにそのOB組織である東大LB会を取り巻く環境に変化が見られ、同会には一段の発展の機会とともに組織の長期的存続が危ぶまれる問題点も明らかになっている。

【発展の機会】

- ・東京大学が国立大学法人化したことにより運動部、OBに対する期待が高まっている。
- ・任意団体が法人格をもって社会的認知を受け、活動を拡大する傾向がある。
- ・大学内グラウンド、運動施設の管理運営を外部に委託する環境になりつつある。
- ・日本サッカー草創期の歴史を保存、継承して欲しいというサッカー界の要望がある。
- ・長年のチーム活動、サッカー教室活動で関係する人の輪が広がり、発展の種となりうる。
- ・Jリーグとの提携、国際的な提携によりサッカーの幅を広げる可能性も出てきている。
- ・眠っている基金の活用選択肢が増えている。

【問題点】

- ・国立大学法人として学内の資産管理の新方針が模索されており、ア式蹴球部の練習・試合の環境は、グラウンドを専用使用してきた昔とは違うものになりつつあり、大学との交渉事が多くなっている。（学内でのプレゼンス）
- ・LB会会員の会費納入率が低下しつつあり、昭和51年卒以降は「納入者数<未納入者数」の傾向がはっきりしている。（財務基盤）
- ・東大ア式蹴球部OBとして多彩な活動実績をあげながらも求心力がなく、若手OBの無関心層を生んだ。（組織としての存立意義）
- ・基金活用のためには、法人として資金管理する体制が必要である。（組織力）

このような状況の下、高まる発展の機会を活かし、諸課題を包括的に解決することを目指して任意団体東大LB会を法人組織に改組することを提案する。すなわち、東大ア式蹴球部の支援という

OB会としての共益活動を強化することを基盤に、さらにサッカーを通じて広く市民社会に貢献できる公益をも目指す法人として、有限責任中間法人に発展的改組する。法人としての事業は、次のように拡大発展させる。

- ①大学サッカーのリーダーを目指して東大ア式蹴球部の育成・強化・支援活動
- ②健康維持増進を目指して青年・壮年・熟年の各年齢層のサッカーチーム運営活動
- ③地域のコミュニティを形成する場を目指して少年や父兄のサッカー教室運営活動
- ④歴史認識を通じて伝統の力を発揮することを目指してサッカーの歴史教育活動
- ⑤国際的コミュニティ形成を目指して海外との交流活動
- ⑥グラウンド・施設管理運営受託活動
- ⑦生涯スポーツ、国際スポーツであるサッカーの情報発信活動

※**中間法人** 中間法人とは、社員に共通する利益を図ることを目的とし、かつ、剰余金を社員に分配することを目的としない社団であって、中間法人法によって設立されたものをいいます。中間法人は、社員に共通する利益、すなわち、社員ら自身の利益を図ることを目的とする点において、不特定多数の者の利益を図ることを目的とする公益法人と異なり、剰余金（すなわち対外的活動により得た利益）を社員に分配することを目的としない点において、営利法人と異なります。また、中間法人は、社員に共通する利益を図ることを目的とする社団であり、社員の存在を要素とする点において、財団法人と異なります。

例えば、同窓会、親睦団体、同好会などがその典型ですが、何らかの活動を行うために任意に結成される社団であれば、営利法人である会社を除き、中間法人として法人格を取得することが可能です。

中間法人には、有限責任中間法人と無限責任中間法人とがあります。有限責任中間法人は、社員が法人の債権者に対して責任を負わない一方、中間法人の設立及び運営について、概ね有限会社に準じた規定が設けられています。無限責任中間法人は、社員が法人の債権者に対して責任を負う一方、中間法人の簡易な設立および運営が可能となるよう、おおむね合名会社に準じた規定が設けら

れています。

有限責任中間法人として発足

<付属資料3>

東大LB会の法人化決まる…2006年（平成18年）2月1日付LBニュースの記事

LBニュース12月1日号（No.39）で、12月18日に開かれる東大LB会総会で会のNPO法人化を議題とする旨ご案内しましたが、その後、本件を検討してきた法人化検討委員会（委員長 樋口周嘉・昭40卒）による、総会への提案内容の最後の詰めの段階で行われた内閣府の公益法人担当部署との面談で「東京大学ア式蹴球部の支援を主要事業の一つとする形でのNPO法人化は公益性の観点から適切ではない」との指摘を受けるとともに、OB会としての法人化であれば、「公益性を要件とする有限責任中間法人がふさわしい」との助言を得るに至りました。

そこで、同委員会は急ぎ検討をやり直し、12月18日の総会において、任意団体である東大LB会に「有限責任中間法人」という形で法人格を持たせ、OB会としての活動の活性化を図っていきたいとの提案を行いました。

総会ではその提案を受けて熱心な討議が行われ、いくつかの要望事項を付した上で、提案通り進めることが承認されました。

総会での承認の後、付された要望事項についての法人化検討委員会の見解を、1月7日に開催した東大LB会役員会において聴取し、その場で、法人化の手続きに入ることに問題がないとの確認を行いました。

これを以て、東大LB会の法人化が正式に決定したことをここにご報告します。

08年末から一般社団法人に

（追記）：2006年1月23日設立の「有限責任中間法人東大LB会」は、2008年12月1日施行の「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（平成十八年法律第四十八号）」により「中間法人法」が廃止されることから、新法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律に従って、その施行日である2008年12月1日に、新法の規定による「一般社団法人」に移行することとなった。

（樋口周嘉）

創部90年 おめでとうございます

盟友チームからのメッセージ

東大の方と親しく交流

日本サッカー協会顧問

クリス・マクドナルド

1950年から日本で暮らしてきた英国人の私にとって、東大とLBの思い出は、横浜のYCACのチームでゴールキーパーをしていた50年代、60年代、そして70年代の前半にさかのぼります。当時もそして今でも、YCACのサッカーチームは横浜の山手にあるグラウンドで定期的にプレーしていますが、私がプレーしていた当時は、多くの皆さんも覚えていらっしゃるでしょうが、おそらく日本で唯一つの芝生のサッカーグラウンドでした。その芝生ゆえに、また東京で働いている外国人のチームであったがゆえに、日本の大学や、実業団などのトップクラスのチームが我々との対戦を希望し、我々の試合日程はフルに埋まっていました。対戦リストには、早稲田WMW、慶応BRB、東大LBなどの大学OBチームも含まれていました。

東大の現役チームとLBとは毎年対戦していましたし、有名な選手たちがビジターとしてきていたことをよく覚えています。特に岡野俊一郎さんとは何度も試合をしました。そして私は何点もゴールを奪われました。その後に岡野さんが日本サッカー協会です仕事をすることになってからも、YCACの試合日程を作成するときに随分と協力していただきました。

私はYCACのキャプテンを長くしていて、試合日程を作成するのが任務の一つだったので、岡野さんにはしばしば連絡を取って手伝っていただいていた。

しかし、最初に思い出される東大OBの方は有馬洪さんです。ご存知のように有馬さんは優れたサイドハーフで、戦後に日本代表として多くの試

合で活躍されました。有馬さんは私にとってもYCACにとっても素晴らしい友人でした。選手を退いて国際審判員になられてからは、私たちの試合の審判をよくしてくれましたし、特に1888年以来毎年定期戦の行われている神戸のKRACとのインターポートマッチでも、何度も審判をしていただきました。

私は、有馬さんとそのご家族とは大変親しくお付き合い頂きました。特に、日本に来たばかりで経験の少ない英国人の私に、戦後すぐの1950年ころのロンドンとはまったく異なる日本の生活に慣れるための、さまざまなアドバイスを頂いたことを思い出します。

横山陽三さん（皆さんにヨウカンと呼ばれていました）も親しい友人の一人でした。横山さんは当時の日本のトップの審判員でした。同じく審判員の浅見俊雄さんとは今でもたびたびお会いしています。

東大やLBとの試合は今でも鮮明に思い出せます。何回勝って何回負けたかまでは思い出せませんが、試合のあとの親睦も大変重要なものでした。シャワーを浴びたあと、両チームがクラブのバーに集まって、ビールとサンドイッチで歓談する場合は、試合そのものと同様に大変楽しいものでした。選手同士がここで新たな友人になることも出来ましたし、その友情がその後も長く続くこともありました。

最近のことですが、東京でのあるレセプションで、荒川吉彦さんと久しぶりにお会いしました。最初は二人とも思い出せませんでしたが、話がサッカーのことになったとたんに、彼は私をじっと見て、「何年も前にYCACでゴールキーパーをしていたマックさんじゃないですか」といいました。そのあとは当時のことについて会話が弾み、荒川さんから、そのころのことを東大の90年記念誌に書いてくれないかという依頼を受けました。

そしてそれは私にとっても大変うれしいことでした。

ご存知のように50年代、60年代の東大は強いチームで、我々との試合もいつも激しい試合になりましたが、同時に真のスポーツマンシップに満ちたものでしたので、東大、あるいはLBとの試合はシーズンの中でも最も楽しい試合のひとつでした。

当時私は、東大の御殿下や農学部グラウンドでも何度も試合をしました。そしてそこは皆さんも思い出されるように、あまり良くない、特に雨の時はひどい状態のグラウンドでした。私は岡野さんや中島裕さんたちとTRICKというチームでプレーしていました。Tは東大、Rは立教、Cは中央、Kは関西学院の頭文字で、真ん中のIはInternational、私と中央大卒で韓国の代表にもなった李さんの二人と、各大学のOBとの混成のクラブチームでした。

このチームでよく東大のグラウンドで試合をしました。グラウンドには更衣室がなかったので、正門前の銭湯で着替えをして、そこから歩いてグラウンドに行っていました。雨の時は大変で、試合のあと泥にまみれたびしょぬれの状態で銭湯に戻らねばなりません。しかし銭湯でさっぱりしたあと、近くの田村という Grill（今はなくなっていますが覚えている方も多いでしょう）でビールを何杯も傾けるという楽しい時間を持ったものです。まさに“good old days”でした。

YCACは今でもサッカーをしています、そんなに多くは行われていません。昔からのメンバーは日本を離れ、その当時のサッカーを知る人は誰もいなくなりました。当時の選手で私だけが日本にいます。仕事は完全にリタイアしましたが。

岡野さん、浅見さんや当時の人たちとは、東京で行われるJリーグの試合や国際試合でたびたびお会いしていますが、そうしたときが、50年あるいはもっと昔の楽しかった日々を思い出すよい機会になっています。

最後に、東京大学のサッカーがかつての関東大学リーグでの地位に復活されることを、またそれによってLBがさらに輝かしい未来を開かれることを、そして2018年の100周年を迎えられることを心から希望しています。

（訳：浅見俊雄）

東大戦は独特の雰囲気

京都大学蹴球部OB会会長

昭和39年卒業 川野眞治

私が在籍した1960-1963年の東大戦は、スコアは2-2、1-2、1-0、0-0の1勝1敗2引き分けの成績でした。私たちの時代では、東大戦は春の京都リーグを戦ったチーム力を秋のリーグ戦へつなげるとともに、先輩諸兄にリーグ戦への手応えをお見せするという意味もありました。しかし、何よりも長い伝統に培われた対抗戦は、リーグ戦とは違った独特な雰囲気があり、特に試合後の交流会では先輩諸兄の前で若者の気取りと気取りがストレートに現われ、いわく「私の対面の意図をかわして（しかじか）…」とか「ゲームをつくろうとした裏を取ったことが成功して（うんぬん）…」といった具合で、負けでもしたら大変でした。相手にいいように言われる。もちろん、負けたからといって、言われればなしということはなく、さらに反論が続くといった具合でしたから、勝敗へのプレッシャーは大変なものでした。今のようにお互いに試合後に肩を並べて飲み



1963年夏、御殿下グラウンドでの対抗戦の後で

に行くなどは考えられませんでした。

私自身のことを言えば東大戦を戦ったのは2回生からで、FWとして戦いましたが、当時の東大CH(石光氏であったと思う)にはほぼ完全に抑えられ、何もできなかったことを記憶しています。本格的に納得できるゲームをしたのは3、4回生のときで、DFとして出ました。3回生の時には、最上級生がチームの要に位置して強力なリーダーシップをとり、春からチーム力が整備されて、その結果が1-0の勝ちという形で出ました。この年のリーグ戦は3位という結果を得ました。翌年4回生のときには大量の卒業生を出し、チームは弱体化されたと言われながらも、DFに上級生を

残したことを頼りに、必死の練習の結果が東大戦では0-0の引き分け。見ている先輩諸兄には極めて凡戦という評価でした。しかし実は、これが京大の作戦、こちらのペースではないが相手のペースでもない、点を取られない守備、しかしゲームの中ではこちらの時間は必ずあるので、そこに集中するというチームコンセプトが奏功し、リーグ戦は3位という結果を得ました。もちろん、そのようなゲーム運びを支えるためのメンタル、フィジカル両面でのトレーニングは随分厳しくやった記憶があります。

現在では、大学サッカーの環境は当時とは随分変わってきています。Jリーグを頂点とするサッカー、大きなビジネスとしてのサッカーの流れは変えようがありません。その中で国立大学でサッカーをするということは、どういうことなのか。サッカー部活動の中でのさまざまな経験とコミュニケーションの結果としてさまざまなことがあるとは思いますが、結局はサッカーが好きだということが大きなモチベーションであると思われる。現役諸君が、そのモチベーションを持って4年間を通せるようなサポート組織がぜひ必要です。私たちOBが今できることは、そのような組織化(と財政基盤の確立)を進めることでしょう。その意味で、東大LBの活動には敬意を表すと共に期待しているところです。

東大球友とのご縁深く

京大OB 昭和41年卒業

伊藤庸夫

昭和43年7月7日は私にとって、人生の記念日とも言えるべき日であった。この日の京都は毎年のことながら、蒸し暑く耐え難い日であった。卒業して3回目の東大戦(京大ではこう呼んでいる)。この機会を逃すことはない、人生最大の決意をした。午前中に京大の東側にある吉田神社で結婚式を挙げ、京大楽友会館で会費制の披露宴を行った。前々から結婚式だけは2人だけで挙げようと決意していた。入社3年目の私はお金も無く、しがらみのない結婚はできないかと悩んでいた。その時にそうだ、京都で東大戦がある。サッカー仲間もいる、という単純な判断で結婚式を決行したのである。

家内は今でも「あなたは東大とのOB戦に出るために私をだしに使ったのね」と言っているが、披露宴の直後、京大農学部グラウンドに直行、家内はウエディングドレスのまま。私はスパイクに履き替えOB戦に出場した。東大のOBのほとんどが当時、関東リーグ1部の御殿下クラブに所属しており、私もその年の3月より入部していたため、いわば仲間内のOB戦であった。だからこそ結婚式も東大戦のある京都でと決断できたのであろうと今でも思っている。東大OBの梅村さんからは「伊藤のそばに行くな、タックル厳禁だぞ」とのありがたい(?)言葉をもらったが、OB戦は引き分けであったと記憶する。

家内とは、日本リーグの三菱重工のサッカー部を引退し、御殿下クラブに入部して最初の試合(43年3月)の御殿下グラウンドでの練習試合で鼻骨骨折、即東大病院に入院、その時泊まり込みで看病してくれたことが縁での結婚であった。以来結婚40周年を今年7月(平成20年)に迎える。東京大学サッカー部との関わり合いがなければ、私の人生も変わっていたことだろう。

東大・京大定期戦は京大にとっては秋のリーグに次ぐ、大きな試合であった。私が昭和37年入学した当時の東大・京大のサッカーは、東大が2部に落ち、何とか1部へ昇格しようと「闘魂」を傾けていた時期であり、京大は私が入学する前年に1部に復帰し、関西大学リーグで花を咲かせようとしていた時期であった。日本リーグもプロも無い時代、まだ進学校が高校サッカーの主流であったころであった。

東大には私の高校(浦和高)出身の浅見さんがOBで、安達弟さん(両氏とも全国優勝している)がキャプテン、そして中学時代、東京都大会で勝てなかった教育大附属出身の畔柳弟氏ら知人も多かった。京大も全国大会出場の広大附属、修道高、神戸高、灘高(当時兵庫県ではトップクラス)、そして私も浦和高から入学、レベルの高い選手が揃っていた。その東大戦が近づく先輩が練習を見に来て「絶対東大だけには負けてはならぬ」と発破を掛けた。そのために6月には東大戦用の合宿があり、暑さに勝つためと称して、今では考えられない水を飲ませないトレーニングも課せられた。結局、私が在籍した4年間、東大戦は1勝2分1敗であった。とにかく蒸し暑さの中の東大戦は秋のリーグ戦への指針となる試合であ

り、技術、戦術はともあれ、精神で激突する戦いであった。その甲斐もあったか、私がいた京大4年間は関西学生リーグで、関学、関大に次ぐ3位の成績を残すことが出来た。関西リーグでは走り負けすることはなかった。それだけに厳しい練習、合宿に明け暮れた4年間であった。

その後1980年、仕事の関係でロンドンに駐在となり、たまたま「お前は日本リーグでプレーしていたのであるから日本サッカー協会の国際委員になれ」といわれ、仕事の合間をみて、the FAとかFIFAとのコンタクト、日本代表チームの欧州遠征の世話をしていた。

その中でロンドンの駐在員仲間にサッカーをやっていた連中がいた。東大出身の尾崎哲男君（富士銀行）を浅見さんから紹介してもらい、彼と「緑の芝生が当たり前のロンドンでサッカーをやろう」と発案。尾崎君が当時ロンドン駐在となっていた東大サッカー部OBの新井さん（運輸省）、吉沢君（新日鉄）、そして三菱銀行の山本君を集め、私と5人でロンドンジャパニーズFCを立ち上げ、日本サッカー界がお世話になったミドルセックスワンダラーズの協力で1ヵ月に1、2度英国人のベテランチームとの試合を行い、家族を必ず帯同して懇親するクラブを結成した。今でもその当時のメンバーとは家族をいれて杯を酌み交わす。これも東大・京大でサッカーをプレーしていたからこそ出来たクラブである。

英国にはオックスフォード、ケンブリッジの名門大学対抗戦が現在も続いているが、1960年のローマ・オリンピックにペガサスクラブとしてオックスブリッジスOBが出場したのが最後で、現在は英国の大学サッカーは影を薄くしている。

日本も日本リーグ、Jリーグのプロ化とともに、大学サッカーのステータスはなくなりつつある。しかし、いつの時代でもどの社会にもリーダーは必要である。昔のようにサッカーでもトップクラス、仕事でももちろん日本を背負って立つ存在であった時代は、望むべくもないが、サッカーにおいても一矢を報いる存在であって欲しいと願っている。

現在はJFLのSAGAWA SHIGA FC（滋賀県）のジェネラルマネージャーをしており、昨年度はダントツの優勝をしながらJ2へは上がらず、毎日を企業サッカーの限界はという課題に挑戦している。結局、私の人生はサッカーとの出

会いで始まり、サッカーで終わりそうである。ロンドンで真のサッカーにめぐり合い、三菱重工を現地でやめたあと、東芝を経て独立、プロのサンフレッチェ広島でJリーグの優勝もし、現在もサッカーマネージメントに携わってられるのは不思議な気がする。

東大同期と親しく交流

京大OB 昭和51年卒業

永井利明

私と東大サッカー部同期との関わりは長い。原点は中学時代（三国ヶ丘中学、大阪府堺市）まで逆上る。御園慎一郎氏との出会いである。廃部になっていたサッカー部を2年生の時一緒に再興し、1年後に堺市で優勝した。またこの年、1966年（昭和41年）のワールドカップ・イングランド大会の「ゴール」という映画を見た。これが我々のサッカーとの関わり方の原点となった。

一浪して大学合格が決まってすぐの3月末、東京に遊びに行った。泊まる当てもなく東京に着き、何とか御園氏に連絡が取れて、武蔵小金井だったと思うが彼が居候していた親類に泊めていただくことになった。しかし、運悪く？御園氏の母上もおられて、「永井君、いま何をしているの」と中学時代と同様お説教を食らってしまった。それ以来、東京では御園氏宅に泊めてもらうことになる。

大学1回生の京都での東大定期戦の時、どこかで見た女性が東大を応援していた。後で知ることになるのだが、その女性は私の高校の同期生で、南谷氏の彼女（今の奥様）であった。今も「永井君」と君付けで呼ばれている。

高校の大先輩の子息（同志社大サッカー部員）が、ある有名会社の就職試験で面接を受けた。その時の面接担当者が定期戦でライバルだった東大OBの植村祐幸氏であった。大先輩から依頼を受けて植村氏に連絡し、お願いした。多分、実力で入社できたと思うのだが、大先輩とその息子は、入社できたのは植村氏とサッカーのおかげだと感謝しており、今でも飲み会の席で話題になる。

50年代同期の「泥蹴会」に準会員ということ

で、十数年来参加させてもらっている。年に一度、3チーム（ダックスと一橋大OB）で試合をするのだが、海外は別として、全国から同期全員、何とか都合をつけて家族ぐるみで集まってくる。私も大阪から無理やり出張を作って参加させてもらってきた。植村氏や私のように今でもしょっちゅうサッカーをしている者もいれば、年に一度のこの会だけという者もいる。しかし、プレースタイルに昔の面影が今も残っているのは興味深い。また、この会は身内なら若手の参加も認められており、池森氏のご子息は昔から参加していた。親子で一緒にサッカーができるのをうらやましいと思っていた。自分の息子で失敗した分、これからは孫に（まだいないが）いかにサッカーをさせるかが今後の私のテーマとなっている。3世代でサッカーを楽しめたら面白い。

一方、東大定期戦は毎年力が入っていたが、あまり良い思い出はない。4年間で1分け3敗。1回生の時は後半から出してもらったがあまり覚えていない。

2回生の時、後半途中まで2-0でリードしていて、今日は勝てるぞと思っていたら、宮武氏に2点入れられて引き分け。今でも悔しさがにじむ。3回生の時は5回生の笠原氏にCKからヘッドを決められて0-1の敗戦。5回生が出て来てもいいのか！と恨んだ。4回生の時はキャプテンであったが、何もできないまま1-2の敗戦。1勝もできなかったのは今でも心残りである。

関西リーグ1部でやっているという自負があったが、東大にはどこかうまくかわされた感じがする。リーグにおいてレベルの一つ上の相手と試合をする中で、両チームとも泥臭いサッカーをしていたと思うのだが、東大の方が若干自由さとスマートさがあったようだ。チームの雰囲気も京大とは違い、東大は一度やめてもいつの間にか復帰しており、出入り自由のところがあった（キャプテンまで務めた人もいる）。東大にはそういうゆとりというか、余裕があった。今振り返れば、京大はこのころコーチもいなくてキャプテン中心の自主運営で、皆いっぱいいっぱいでサッカーだけしかやっていなかったような気がする。

大学を卒業して30数年経った今も、男組（京大OB中心のシニアチーム）において、同期では御園氏、南谷氏、堀井氏、先輩では笠原氏、佐々木

氏と一緒にプレーしており、LBにも時々参加させていただいている。先日、淡路島で銀パンツ（70歳以上）の方々が試合をしていた。金パンツ（80歳以上）の方もおられ、まだまだ元気で走っていて、何より楽しんでサッカーをしていた。20年後、いや30年後、我々も同じように走り回り、楽しんでサッカーをしていることだろう。

今後とも長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

検見川Gで苦い思い出

京大OB 平成元年卒業

島 正樹

東大ア式蹴球部創部90周年、おめでとうございます。近年は学生スポーツを取り巻く環境も大きく変わってきておりますが、これまで積み重ねられた伝統に恥じない東大・京大両校の現役の活躍を祈念するとともに、貴OB会の今後の更なる発展を祈念いたします。

さて今回、東大サッカー部との関わりについて何か書いて欲しいとのお話をいただき、私が真っ先に思い起こしたのは検見川グラウンドにまつわることです。私が現役のとき、東大主管で行われた東大戦はいずれも検見川グラウンドで行われました。1回生の時（昭和60年）、京大は東大戦3連敗中で、その年に負けると両校定期戦史上初の「東大戦で勝ったことのない学年」が出てしまうということで、京大はかなり気合が入っていました。とは言うものの、京大サッカー部に籍を置いてわずか3ヵ月だった私はまだ東大戦のもつ意味についても今ひとつ実感できておらず、当時はまだ珍しかった芝生（検見川）での試合を楽しみにしていた程度でした。芝生のピッチに備えて取り替え式ポイントのシューズを試合前日の土曜日に新宿で買い、意気揚々と検見川に乗り込みました。

当時の合宿所の古さに驚きつつ（失礼！）、練習で新しいシューズの足慣らしをして迎えた東大戦、「1軍戦に勝つにはまず2軍戦で勝利を！」というOBや上回生に送り出されて午前中の2軍戦に先発出場しました。

試合開始から京大がボールを支配し、その流れの中、私は前半10分過ぎ（だったと思います）に

ゴール右隅に左足で先制ゴールを決め、ベンチや京大の応援の方々を大いに沸かせました。

しかし、その直後に悪夢が私を襲いました。慣れない芝生に履き慣れない新しいシューズの組み合わせが災いし、激しくもなんでもないプレーで芝生にポイントが引かかって右足首を激しくねんざ、そのままあえなく前半20分で負傷退場の憂き目にあってしまいました。歩くことはおろか、地面に足をつけることさえできない状態で、そのまま合宿所までの長い道のりをチームメイトに背負われて帰りました。

京大はその後リズムを失いズルズルと失点を重ね、結局1-4で敗戦、午後の1軍戦への勢いを完全に削いでしまいました。OB戦が行われている間に近所の整形外科でレントゲンをとり、骨に異常はないことが確認できてホッとほしたものの、自分にとっては後味の悪い東大戦になってしまったな、と残念な気持ちで“観戦のため”午後の1軍戦を迎えました。

奮闘むなしく東大にリードを許し重苦しいベンチで試合を観戦していた私に後半30分過ぎにコーチからかかった一声は「島、行けるな?」。病院での処置のおかげでゆっくり歩けるくらいにはなっていました、そんな状態ではまともに走れるはずありません。しかし、初めて経験する東大戦特有の雰囲気の中、最下級生の私は「ダメです」とはとても言えず、言われるがままにピッチに立ちました。当然、役に立つはずもなく、失意の中2-4で敗戦、京大は史上初の4連敗を喫したのでした。その後右足首は完治までに1年以上かかってしまい、今でも古傷が痛むことがあります。

このような苦い思い出で始まった東大検見川グラウンドとのかかわりですが、その後も現役時代で言えば3回生の時の東大戦（京大は充実したチーム力で必勝を期して臨みましたが、まんまと東大の術中にはまって攻めきれず0-1の惜敗）、何年かぶりに復活させた夏合宿の一環としての東京遠征（3、4回生）時のベースキャンプ（当時大学トップレベルだった順天堂大のケガ人チームとの試合で感じたレベル差）など、結局苦い思い出ばかりとなってしまいました。しかしOBになってからは、東大戦のOB戦やOB七帝戦など、機会は少ないですが楽しくボールを蹴らせていただいています。今後、検見川のピッチに立つ機会

がどれほどあるかわかりませんが、そのときは現役時代のことを思い起こしながら、いつも以上にケガに注意しつつボールを追いたいと思っています。またお世話になりますのでよろしくお願いします！

懐かしい東早慶3強時代

慶応義塾大学OB

昭和27年卒業 松岡 巖

東大ア式蹴球部創部90周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

東大サッカー史への寄稿のお話がありましたので、昭和22年から23年にかけて東大、早稲田、慶応が三つ巴でリーグの優勝をかけて激しく競い合った時代の思い出と、その間にいろいろとご縁のあった人たちの思い出も一緒に書いてみたいと思います。

昭和22年から23年に東大で活躍されたメンバーの方々とはいろいろな場面で深いつながりがあります。22年の関東大学リーグは私にとって大学リーグでの初陣でもあり強く印象に残っています。22年10月17日、早大東伏見グラウンドでの試合は5-3で慶応が勝つことができました。東大のメンバーの中には湘南中学（旧制）のOBである大埜さん、早川さん、海老原純さんが中心メンバーとして活躍されておられましたが、大埜さんは私たち湘南中学（旧制）サッカー部が21年に国体兼全国中等学校大会で神戸一中を破って全国優勝したチームの監督で、我々にとっては大恩人です。早川さん、海老原さんも練習に再三参加し指導してくださった先輩でした。また、早川さんは東大チームのCFとして活躍されておられましたので、私の東大戦での任務はセンターバックとしてマンツーマンで早川さんを徹底的につぶすことでした。必死で戦った記憶のみが残っています。この年のリーグは早大が優勝、慶応が第2位、東大が第3位で終わりました。

23年はびっくりすることに、東大の22年のメンバーが全員留年して優勝されました。この年の慶応戦は11月7日に神宮絵画館前で行われ5-2で完敗しました。当時の東大サッカー部のメンバーの皆様とのご縁でいうと、早川さんの実弟の小林忠生君が、また二宮泰さんの実弟の寛君がそれぞれ慶応で大活躍され、日本代表としても活躍され

ました。また、松元さんのお嬢様のユウ子さんが慶応のマネージャーとして活躍されました。岡本さん、高橋さん（クロチャン）とは今度は日立でチームメートとして戦い、全国実業団大会で優勝した思い出があります。

昭和24年以降に湘南中学時代の同級生の海老原朗君、香川君が東大サッカー部で活躍されました。またサッカー協会の会長として活躍された岡野君とはC FとC Hの関係で競り合った仲で、いろいろと印象に残っている場面がたくさん思い出されます。

その後、東大は都リーグに、慶応は関東リーグ2部に落ちました。早大は都リーグまで落ちたが現在は1部に上がって頑張っています。

いつの日にか早慶東が再び関東リーグの優勝をかけて対戦する日が来ることを祈って待っています。

ア式蹴球部の名の長き友

東京都サッカー協会会長

早稲田大学ア式蹴球部OB

昭和30年卒業 安田一男

2000年の終わりごろか、浅見俊雄さんから、東大と早稲田が久しぶりに公式戦で対戦することになったと聞きました。そういえば、1956年に東大が2部に陥落して以来40年ほどは、「早東戦」の公式戦は行われていなかったのです。

2000年度に早大は関東大学2部8位となって、次年度は東京都リーグ1部に降格し、東大は逆に都リーグ2部で優勝して1部に昇格したので、早大と東大が、2001年度は同じリーグで戦うことになったのです。私のように60年以上サッカーに携わってきたものからすると、早稲田と東大が関東1部ではなく東京都リーグで対戦するというのは大変残念なことではありましたが、同時に早東戦が復活したことには懐かしさを感じたものでした。

私は1949年に早大高等学院（新制）に入学しました。当時の関東大学リーグ1部の優勝回数は東大9回、早大7回、慶応が5回で、特に早大は1948年度には3連覇しようとしていたのに東大に敗れ、優勝をさらわれていたので、東大に対するライバル心は強く、東大に打ち勝つことが早大の

至上命題でした。私はまだ高校生だったので、試合出場には関係ありませんでしたが、東大戦には他大学との対戦とは異なる悲壮な雰囲気を選手たちに感じていました。東大に勝つことが、リーグの覇権に大きく関与するので、OBの関心も高く、「早帝（東）は何日だ。必ず応援に行くから」という強い激励も多くありました。当時は「早東戦」が大学サッカーの華であったと思います。

私の直接関係した試合で思い出すのは、1953年正月に行なわれた第1回全国大学蹴球選手権大会の東大優勝であります。決勝は東大対早大でしたが、実力的には優勝してもよい力を持っていたことを自負していたのに対し、東大はリーグでは最下位でした。したがって早大としては当然優勝できるという気持ちで戦いましたが、東大に完敗しました。東大には旧制インターハイに出場した選手が何人かいて、正月には異常な力が出たのではないかと思います。

もう一つ思い出す試合は、1954年11月28日の関東大学リーグ最終節の対東大の試合です。会場は明治神宮外苑競技場、天候氷雨、グラウンドコンディションは泥濘の中で試合は始まりました。開始早々、早大のシュートをセーブして防いだ東大ゴールキーパーの立石さんは、ユニフォームが氷水でびしょりになり、体に凍り付いて思うように動けなくなってしまい、結果は早大が8-0で勝ちました。ディフェンシブハーフの私が3得点させてもらいましたが、あの悪コンディションでなければ、当時名ゴールキーパーといわれていた立石さんから3点も取ることは出来なかったと思います。

東大も1950年代後半まで関東大学リーグの1部でがんばっていましたが、その後2部となり、いつのころからか東京都大学リーグにいられています。早大も1998年関東大学リーグ2部になり、その後は東京都大学リーグまで陥落しましたが、やっと2007年に関東大学リーグ1部に復帰しました。

東京都サッカー協会会長としては、東大が大学サッカーのあり方を示すよきモデルとして都リーグで活躍してくれるのを有難いこととは思いますが、往時の「早東戦」を知る者としては、早稲田と東大が関東大学リーグ1部で相見えることを夢見ております。

蛇足ながら、関東所在の大学で、ア式蹴球部と名乗っているのは、東京大学、一橋大学、早稲田大学の3校のみであります。機会があれば、この3校でア式蹴球リーグを戦うのも一興かと思えます。

親密なご交際いただいて

北海道大学OB

昭和16年卒業 瀬藤進一

まず自己紹介から始めます。

私は大正7年（1918年）、東京麻布生まれ、生粋の江戸っ子。奇しくも東大サッカー部創立の年に生まれた90歳のクレイジー・オールド・サッカーマンです。旧制青山師範学校付属小学校時代（大正15年、1926年）からボールを蹴り始め、中学・高校時代（昭和6年、1931年～昭和13年、1938年）は、7年制の東京高等学校で＜ボールを蹴る合間に勉強＞のスタイルでサッカーを楽しみました。引き続き旧制北大時代（昭和14年、1939年～昭和16年、1941年、開戦のため繰り上げ卒業）は、親友からの忠告＜大学だけはサッカーを止め、学業に専念せよ＞を素直に受け入れ、＜学業の合間にスキー＞のスタイルで大学生活を終わりました。戦時中は海軍技術将校として航空燃料・潤滑油の生産に従事、戦場へ赴く事も無く＜命拾い＞。

自己紹介を終わり、以下、私のサッカー生活を通じて東大サッカー部大先輩から若手の先輩（と申しても超70歳）までの方々からご指導、ご支援、ご協力を頂きました＜想い出＞を記します。

（1）阿部栄夫先輩：旧制東京高校・東大

昭和11年（1936年）ベルリン・オリンピックの日本サッカー代表チーム決定に先立ち、その1次候補メンバー（40名）の中に、思いも寄らぬことでしたが、当時17歳の私も選ばれ、新大久保の陸軍士官学校グラウンドで行われた選考ゲームに出場、東高時代の阿部先輩と同じチームのFWとしてプレーしました。当時のポジション編成では、CF阿部先輩、LW瀬藤でした。カウンター攻撃の形で攻め上がったRWからペナルティ・マーク近くに飛んできたクロスを、阿部先輩は、相手DFのボディチェックを物ともせず胸で受け、半回

転すると同時に、ゴール前へ走り込んだ私の足元に落ち着き払ってパス、難無くゴール。相手チームのGKは、代表イレブンに選ばれた佐野理平氏でした。

阿部先輩がクロスに向かう姿勢は全く安定しており、無理のない落ち着き払ったプレー振りで、今でも鮮やかに思い出されます。ストライカーはゴール前の厳しい攻守の競り合いで、沈着・冷静・集中が大切であることを明確に示せる好プレーヤーでした。ネットに突き刺さるような強烈なシュートはあまり見られませんでした。守備陣の意表を突くボールタッチで得点する異色ストライカーとして尊敬しております。

（2）森孝雄先輩：旧制五中・旧制東京高校・東大

昭和12年（1937年）、私が東高3年生でサッカー部主将の時、森先輩は監督として厳しく、かつ和やかな雰囲気のもとで、私たちの指導に当たられました。特に部員がボールに寄るスピードを少しでも落とすと、「いくら上手にトラップが出来ようが、良いシュートが出来ようが、ゲームでは通用しない。練習で失敗は当たり前。失敗を続けているうちにいつか進歩する。自分の目指すプレーに挑戦せよ」と大変貴重な教えを賜りました。私たちは森監督の至言をひたすらに実行し、全部員が切磋琢磨して励んだ結果、昭和13年（1938年）、第15回インターハイで好成績を残すことができました。この年は決勝戦まで進みましたが、広島に1-5（1-1）で敗れました。

（3）篠島秀雄大先輩：旧制東京高校・東大

篠島さんは、私にとりましては東高サッカー部、並びに会社勤務（三菱化成）時代の大先輩です。昭和50年（1975年）、65歳の若さで亡くなりましたが、その後も未亡人の春枝様から格別のご厚誼を頂いております。

平成18年5月23日＜日本サッカー殿堂＞入り掲額式の際は、有難いことにご家族と一緒に参列の機会を賜りました。顕彰額に刻まれた文章から大先輩のサッカープレーヤーとしての輝かしいご活躍、並びにJFA常務理事、理事長、副会長として、20年以上にわたり、日本代表チームの積極的な海外派遣、海外チームとの交流の強力な推進など、日本サッカーの発展に貢献されたこと、また、昭和43年（1968年）三菱商事の諸橋会長らと

ともにテレビ東京の＜三菱ダイヤモンド・サッカー＞の放映を実現、情報の乏しかった時代に世界トップクラスのプレーを定期的に放送し、サッカーの繁栄の種子をまかれたことなど、極めて広範囲のご活躍を身近に感じました。

篠島大先輩がお若い時代、昭和13年（1938年）、東大御殿下で開催された第15回インターハイで、私たち東高チームが決勝戦に臨んだ1月6日の朝、合宿所へ思いも寄らぬ＜陣中見舞い＞をお届け下さいました。午後2時から始まる試合を控え、ゆっくり朝食、リラックスしておりました私たちの耳に入った女中さんの声「篠島様から、皆さんの体をほぐすために派遣された、スポーツマッサージ団がお見えになりました」という声に驚くやらあわてるやら。当時はまだ一般に普及していませんでした＜スポーツマッサージ＞を全員が緊張した面持ちで受けました。初めての経験で、＜ほぐされるはずの筋肉がかえって硬直した＞仲間もあり、正に猫に小判のたとえに漏れない＜超豪華の差し入れ＞でした。

このスポーツマッサージ団は、ベルリン・オリンピック日本代表チーム帯同の超一流メンバーだったと後日判明。篠島大先輩がご自身で後輩をもみほぐしたかったところだが、代わりに派遣されたと知って、その温かいご配慮に感銘いたしました。

篠島大先輩のサッカー選手としてのプレー振りと将来性を、竹腰重丸氏は、次のように高く評価しています。

「彼と同期入学の部員は、東大連勝の主軸となった優秀選手が多かったので、入学早々はさして際立った特色を持つ選手とは見なされなかったが、高校時代に習熟した精密なボール扱いとバランスの良く取れた体を基に着実に上達し、第2年を終わるころにはチームに不可欠の選手となっていた。技術的に特異な長所を持つというよりも、気力にあふれ、気構えのしっかりした剛毅な選手であった。決して愚痴は云わず、たとえ味方が失敗しても、自分がより正確にパスしていたら果たして如何と反省するといった具合で、スポーツ選手として大成を期待し得る優れた性格を身に付けていた」。（『篠島秀雄君を偲ぶ』篠島君と極東選手権大会）

また篠島大先輩の極東大会出場に関するエピソードについて、竹腰大先輩は次のように書いてい

ます。

「東大は昭和2年以来4年連続でカレッジリーグで優勝し、昭和5年5月に行われる第9回極東大会には、東大主体の日本代表チームで出場することが決められていた。東大中心のチーム編成となると、攻撃の主力ゲームメーカーであるR I 篠島は欠かせない存在であり、ぜひ出場してもらわなければならないと決心、2月初めころだったと記憶するが、外交科高等文官試験を5月に受験するといっていた篠島君に、外交官になることを断念して、ぜひ極東大会に出場するよう要請した。大学在学中に高等文官試験をパスしなければ、東大法学部に入学した意味が無いとさえいわれていた時代であったから、受験を止めろというのはずいぶん無茶な話であったが、彼は快く応じてくれた。サッカーのこと以外何も省みるひまもなかった私でも、さすがに人の一生に関することを、あまりにもあっさり応諾されたのには驚き、直ちに工学部の研究室に部長の末広恭二先生を訪ねて、事の次第を報告かたがた先生のご意見を伺った。末広先生は振動学の世界的な権威であり、禅の修養も積まれ、われわれ部員一同が尊崇して止まなかった偉大な方であるが、いともあっさりと、君が余り心配することはない。篠島は何をやっても大丈夫な男だ。外交官を断念して極東大会に出るのもいいではないか。やらせろとのことでびっくりし、かつ安心した次第である」。

（4）竹腰重丸大先輩：旧制山口高校・東大

昭和13年（1938年）、第15回インターハイの決勝戦で広島に敗れた私たち東高に対する竹腰大先輩の戦評「最後の汗の一滴までしぼり出して戦ったと客観的にもいえる歴史が東高にはなかった。広島イレブンが同地在住の六高・京大の先輩、中野氏の指導を、三顧の礼を尽くして迎えたことは、チームの志向の良さを物語るものであり、広島島の戦績はその求める心が実現せられたものと云うべきであろう」はけだし名評であり、私達は都会チームのひ弱さを反省いたしました。

私はこの大会で仲間プレーヤーの好アシストを得、総得点10ゴールの内、8ゴールを挙げました。竹腰大先輩は私の東高時代の先輩・横山陽三氏を通じ「東高を卒業後、東大を受験するよう」お誘いを受けました。当時の全国一の強力ストライカー・六高の直木（和）と瀬藤との2トップを

もくろんでおられたようでした。単純人間の私はためらうことなく＜東大受験＞へ傾きましたが、サッカー部の親友N君から「お前は軽はずみの性格で、大学リーグの花形プレーヤーとして褒めたたえられると有頂天になって身を誤る恐れあり」との有り難い忠告を受けました。私の弱点を突いた正当な教訓を遠慮なく言ってくれた親友に心からの謝意を呈し、東大でのサッカーを諦め、雪降る北海道へ渡りました。

(5)横山陽三先輩：旧制東京高校・東大

上記の通り、北大では曲がりなりにも学業に励み、＜講義の合間に冬はスキー＞のスタイルで粉雪舞う十勝岳を楽しみ、学生生活を終わりました。私のサッカー生活は大学時代3年、戦時4年の合計7年の空白がありましたが、戦後、JFA理事で朝日新聞社（スポーツ・コメンテーター）の宮本能冬氏のご推薦による＜東京ベテランス・クラブ＞への加入により再開され、多数の好プレーヤーとボールを蹴る機会を得、東大LB各位（横山・須賀・大貫・有馬・三上氏ら）との交歓が始まりました。横山先輩は私がLBの戦力となると考えられたようで、ある日突然「瀬藤はLBのメンバーとして正式に加入してもらおう」といわれ、「北大卒の私がなぜ東大LBに？」といぶかりましたが、横山先輩いわく「一高と東高は東大教養学部になった。従って瀬藤は東大教養学部卒業である。よってLBメンバーとして正式に迎える」と有り難きご託宣でした。LBでは主として左HBとしてプレーし、大学と戦時中は辞めていましたサッカーを再び楽しみました。LBメンバーの期間は私の九州転勤（昭和26年）で終わりました。終わってみると、私のLB加入に際して横山先輩から承りました＜迷ご託宣＞はだれからも、反論されない＜名ご託宣＞だったと懐かしく思い出しております。

(5)岡野俊一郎さん：旧制五中(小石川高校)・新制東大

私よりお若いので先輩とは申し上げず、岡野さんと呼ばせていただきます。岡野さんは平成6年(1994年)、SOIの20周年記念祝賀会にIOC委員・JFA副会長としてご出席、来賓祝辞の中で「私は、昭和23年に旧制五中の4年修了時に一高(旧制)を受験しましたが残念ながら合格できず、

止むを得ず新制大学へ進みました。従ってSOI会員の資格をもてないことになったのを大変残念に思っております。幸い、SOIの初代委員長・小林孝正さんが旧制中学の先輩であり、また私がサッカー協会に関係しているという縁で、SOIの会に最初のころからお招きを受けて参ったというようなことでございます」とご自身がSOIに格別の関心を抱いていると述べておられました。野津大先輩のSOIに向けての温かいお志を継承しておられる方です。最近のSOIドイツ・ツアー（平成20年3月31日～4月8日）に際し、対戦相手の3チームに対しJFAから多くの記念品の提供を託されましたのも、岡野さんのご配慮によるものです。また平成19年から始められた＜全国ロイヤル大会＞（超70歳の対抗戦・国立競技場）には旧知のSOIメンバーに交じり生きいきとゲームを楽しめました。高齢者が自分の好きなスポーツを生涯にわたり楽しみ続けることが大切だと思います。私たちSOIは「サッカーが好きでやっている。健康のためにやっているのではない。健康は後から付いて来る」と故加納孝君が述懐していましたが、私達のサッカー活動が次第に市民権を得、全国各地に高齢サッカーマンが増加しております。この大会参加希望者を、当日のプログラムに合わせて制限しなければならない事務局のご苦労は大変のようです。なおこの大会のスポンサーは三菱東京UFJ銀行（畔柳信雄会長は東大LBメンバー）、また主管事務局は東大LBで、樋口周嘉氏以下多数の方々のご協力のもと盛大に挙行されております。

(6)野津謙大先輩：広島一中・一高・東大

野津大先輩には大変お世話になりましたサッカーOBインターハイ（略称SOI）にまつわる思い出を記します。SOIは昭和49年(1974年)旧制高校サッカー部OB（全国28校、1400名）をもって創設されました。創設以前から関西では四高対六高の定期戦、関東では五高、静岡、浦和、武蔵、東高、北大予科などの間で交歓戦の形で行われていたのが、一気に全国規模の組織へ広がったものです。第1回大会は参加校は15校の参加で始まり、第3回大会の参加校は29校に及びました。SOI創立祝賀会へお招きした野津大先輩（当時JFA会長）からいただきました祝辞「わが国は世界一の長寿国と言われるが、医者でもある私に

言わせれば、医療技術の進歩によって寿命が延長されたが、多くの寝たきり老人や半病人が含まれており、この現状を改めなければなりません。今般、旧制高校蹴球部OBの人達たちが集まり、青春時代に培った蹴球を通じての友情を呼び戻し、再びボールを蹴ることとなったのは、まことに時機を得た企てであります。どうかこの機会を活用され、高齢者生涯スポーツの普及と発展に励まれることを期待します」とのお言葉に対し、われわれは創設以来の33年間の活動を通じ、ご期待に沿うことが出来たと喜び、さらに今後の発展を目指して互いに鍛えあいたいと念じております。

次に多くの方々からのお話と重複することを承知の上で、野津大先輩の日本サッカー界発展にかかわるご功績について記します。野津大先輩が第4代JFA会長として、21年間（昭和30年～51年）日本サッカーの技術の向上に力を注ぎ、特に昭和35年、日本代表コーチとしてデットマール・クラマー氏を招請したことは、当時のJFA役員の一部の反対を押し切った大英断として評価されております。

クラマー氏は昭和35年10月、初めて来日して40日間滞在、さらに昭和36年4月、2度目の来日では13カ月の長期間滞在し、代表チームの育成、ならびにサッカー人口の底辺拡充に全力を投入したといわれます。クラマー氏は野津大先輩の期待に沿い、情熱を傾けて代表チームの育成に励み、選手全員の努力も功を奏し、その結果、東京オリンピックでは強豪アルゼンチンを破り第8位。メキシコ・オリンピックでは主催国メキシコを破って第3位。さらにはFIFAフェアプレー・トロフィー、ならびにUNESCOよりピエール・ド・クーベルタン・フェアプレー賞受賞に輝きました。

野津大先輩とクラマー両氏が、日本サッカー発展の基礎の構築に注がれたご努力を忘れることはできません。私たちはサッカーを生涯にわたり楽しむため、その技の巧拙を問わず、人間性の高揚を目指し、仲間たちと安全に、仲良く、助け合い、高齢者サッカーを十分楽しみ、元気で続けたいと思います。いささか手前味噌になりますが、私たちSOIが33年間の長期にわたり、高齢サッカーマン・クラブとして活動し、発展し、揺るぎない伝統を確立できたのは、メンバーの一人

ひとりが、＜人様に絶対迷惑を掛けない、真の紳士である＞との不文律をかたくなに守り続けた結果だと確信しております。好きなサッカーを、善き仲間と共に楽しみ下さい。ノブレスオブリージに徹し、心豊かな生涯サッカーを楽しみましょう。東大サッカー部90周年を心からお喜び申し上げ、併せて現役、OB各位のご健勝を祈念申し上げます。

注：1949年（昭和24年）5月、旧制の東京高校は新制東京大学に統合された。

[引用文献]

- (1) 日本サッカーのあゆみ 日本蹴球協会創立50周年記念出版
- (2) 野津謙の世界 学芸書林 1979年3月25日第1刷発行
- (3) 篠島秀雄君を偲ぶ（非売品）1976年2月11日発行
- (4) 若き血潮は燃える旧制高校蹴球大会誌 竹内至編（非売品）
- (5) 素晴らしきサッカー集団 サッカーOBインターハイ5年の歩み（非売品） 小林孝正編